

『伊曾保物語』の翻訳底本から文語祖本説の再検討へ

From the source text of the *Isoho monogatari* Amakusa translation to a reexamination of the hypothesis of an urtext in classical Japanese

兵頭俊樹

HYODO Toshiki

和歌山大学クロスカル教育機構協働教育部門

Abstract

In this study I elucidate the fact that, through a correspondence among the fables, the Japanese orthography text and the first volume of the Amakusa text were from a Latin or a Spanish edition based on the late 15th-century Steinhöwel edition in Latin and German, and argue that the second volume of the Amakusa edition was based on the so-called *Aesopus Dorpii* of the first half of the 16th century. In order to do so, I identify correspondences, not only in the titles of fables, but in the use of words and phrases in the text, and also clarify places in several fables in which creative additions were made to the source text. Through this clarification of the source texts for the translation, a reconsideration of the hypothesis positing an urtext in classical Japanese is called for. It has been nearly a century since the promotion of the hypothesis that the Japanese orthography edition and the Amakusa edition were both based on an urtext written in classical Japanese. Here I reexamine the evidence underlying the urtext hypothesis, and analyze the examples from the *Fables* found in Rodriguez's *Arte da lingoa de Iapam*, from which I identify the existence of a double standard in the accepted notion of a four-element classification system, and thus reject the existence of an urtext.

キーワード : 天草本伊曾保、Aesopus Dorpii、日本大文典、文語祖本説

はじめに

谷川俊太郎に『イソップ^{うた}詩』(2016)がある。邦訳では最も原典に近い中務哲朗訳イソップ寓話をもとに30編を選び、七五調のリズムをもとにした詩と寓話画集が一体となっている。イソップ寓話は長い歴史のなかでたびたび韻文化されてきた。バブリオス、アウイアーヌス、中世にはラテン語・欧語でも、近世ではラ・フォンテーヌの『寓話集』のなかにも入った。また洋の東西を問わず挿絵や版画も好んで用いられてきた。印刷術揺籃期のシュタインヘーベル本でもそのスペイン語版でも、また万治の絵入り整版本でも、最近刊行されたばかりの寛文の頃とされる絵入卷子本でも¹。寓話が詩となりこれに絵が加われれば、親しみやすくもあり記憶にも残りやすい。子供にばかりでなく大人にも。また我々にとっても言葉の壁がある時には挿画がテキスト検索の助けともなる。

16世紀の終わりころ我が国に入ったイソップ寓話には、ローマ字で綴られた天草版・伊曾保と国字本とも呼ばれる仮名草子・伊曾保物語とがある²。天草版は明治の終わりに新村出によって漢字かな混じりに翻字され、何度か加筆修正がなされて今日に至る³。天草版と国字本の類似と相違をもとに、両者を包みこむような文語祖本があったのではないかとされてから一世紀近くがたつ⁴。また天草版(上巻)と国字本の翻訳底本として、中世のラテン語訳イソップ寓話を核に1476年頃ドイツで出版されたシュタインヘーベルの羅独本が挙げられてから半世紀近くになる⁵。天草版上巻と国字本に関してはタイトルの照応と収録順をシュタインヘーベル本と比べて確認するだけでも特に問題はなかった。これに対して天草版下巻は、タイトルも部分的にしかシュタインヘーベル本と重ならず、収録順もばらばらで、他の翻訳底本の存在の可能性も指摘されていた⁶。また天草上巻25話が1話を除いてすべて国字本に同じ話があるのに、下巻のほうは、45話のうち1、2話しか国字本になく、シュタインヘーベル本に対応するものも17話しかない。いっぽう上に挙げたシュタインヘーベル本の流れをくむスペイン語版が特に国字本に関わることもわかって来た。イソップ伝冒頭の地名やアテネの商人の登場、また寓話部巻末に近い2話などがその根拠となる。

中世のテキストを中心にしたシュタインヘーベル本の後に、人文主義者たちがギリシア語写本からラテン語訳したイソップ寓話を主体にした16世紀前半のドルプ本が続く。結論を先に言えば、1536年にフランスのリヨンで刊行されたドルプ本、ないしこれ以降の版が、天草版下巻の翻訳底本である。タイトルの照応のほかに、収録順にも明らかな関係が見てとれる。本稿ではさらに天草下から数編を取り上げてドルプ本とテキストの語句の対照・比較をおこなう。国字・天草下で共通するとされてきた1、2話については、これにシュタインヘーベル系とドルプ本も絡めて語句の対応関係を見出して整理し、底本にある部分と翻訳で追加・脚色された部分の分析を試みる。

天草版と国字本の翻訳底本がほぼ解明できれば、次にはたして本当に伊曾保物語の文語祖本というものが存在したのかが問題となる。祖本説の由来をたどり、ロドリゲス『日本大文典』における今日的な意味では必ずしも厳密ではない引用のあり方を吟味する。この文典に引用された伊曾保の文語 20 余例は 4 分類され、やがてその 1 分類を成すべく蝉が鳥に変わった例が引かれ、さらに例文数を増やして古典文学大系に入り、その後天草国字が合冊の文庫本ともなっていてこの分類法は広まっていった。シュタインヘーベルとの関係を論じた小堀桂一郎もなお、祖本説を原・伊曾保物語と呼んでその存在を想定し、江戸後期の『絵入り教訓近道』を加えて紹介した武藤禎夫もこれに倣っている。初め控えめな仮説として祖本説を提出したのは新村出であったが、これに大文典の用例のやや奇妙な分類法やダブルスタンダードが加わり、これが研究史上踏襲されて文語祖本説が形成されていった。本稿はその過程を検証して、はたして本当に祖本は存在したのかを以下のように考察する⁷。

1. 仮名草子『伊曾保物語』（国字本）と『エソポのハブラス』（天草版）
2. シュタインヘーベル本羅独版イソップ寓話（1476年頃独ウルム刊）
3. シュタインヘーベル系スペイン語版イソップ寓話（1546年アントワープ刊）
4. 天草版上巻・国字本とシュタインヘーベル系の寓話の対応
5. 中世の伝統を継ぐシュタインヘーベル本からルネサンスのドルプ本への手掛かり
6. ドルプ本の構成と訳者・翻案注釈者
7. 天草版下巻とドルプ本の寓話の対応
8. 山羊のあご髭ほどの知恵
「野牛（山羊）と狐」国字下 14（←シュタインヘーベル本 Rimicius 3 [St.]）
「狐と野牛」天草下 30（←ドルプ本 Valla1）
9. 子羊をさらう鷲に憧れたカラス
「鷲と鳥」国字下 12（←シュタインヘーベル本 Rimicius 1 [St.]）
天草下 29（←ドルプ本 Barlandus 18）
10. 空を飛びたがる亀を鷲がつかんで
「亀と鷲」天草下 25（←ドルプ本 incerto interprete 12 + Goudanus <Avi.> 2）
11. 進軍ラッパの罪
「陣頭の貝吹き」天草下 7（←ドルプ本 Valla 9, Barlandus 10, Rimicius 46 [Dorp]）
12. 中世アラブの蒼鷲から江戸の植木に巣くう鳩
「鳩と狐」国字下 28（←シュタインヘーベル系スペイン語版←アラブ圏）
13. 「イソップ伝」冒頭の地名 ヨーロッパ、フリュギア、トロイア、アテネ
14. 文語祖本説の由来
15. ロドリゲス『日本大文典』の文語 20 余例とその四分類の意味

16. 「イソップ伝」より ——天草版「罅りを以て夏の暑さを慰め」と国字本「暑き日影も忘れ井の慰め草」——
17. 祖本説のその他の根拠

1. 『エソポのハブラス』（天草版）と仮名草子『伊曾保物語』（国字本）

天草版と国字本の違いを一瞥するために、狐と野牛（山羊）の話の後半を挙げる。天草版に基いて多少の脚色を加えた新村訳も参考に添える。野牛は天草版で *yaguiū* だが、天草・国字版ともに山羊のこと。狐と山羊が水を飲みに井戸に入り、出られなくなった狐が一計を案じ、山羊を騙して踏み台にして外に出る。以下、外に出る場面から。天草版は東洋文庫 570、国字本は日本古典文学大系 90 に拠る。新村訳は全集から。旧字は改め、ふり仮名は省略した。

天草版

狐飛んで井桁の中に飛び上つて跳ねびちたいて喜び、余りの嬉しさに野牛のことをばはたとうち忘れた。野牛はいつ引き上ぐるぞと待てども待てども、狐は知らぬ顔して居るによつて、野牛罵つて言ふは「やあ貴所は約束は忘れたか」と問うたれば、狐「そのことぢや、御辺の頤に有る鬚の数程、頭に知恵が有るならば、遠慮も無う井の中へははひるまいぞ」と言うて嘲つた。

下心。賢い人の俗ひには、先づ事を始めぬ前にその終りを見るものぢや。

国字本

狐そのあたまを踏まへて上にあがり、笑つて云、「さてもさても御辺はおろかなる人かな。その鬚ほど知恵を持ち給はば、われいかゞせん。なにとしてかは御辺を引き上げ奉らんや。さらば」とて帰らぬ。野牛、空しく井のもとに日を送りて、つゐに、はかなくなりけり。

其ごとく、我も人も難儀にあはん事は、まづわが難儀を遁れて後、人の難をも除くべし。わが身地獄に落ちて、他人楽しみを受くればとて、わが合力になるべきや。これを思へ。

新村訳

狐は...山羊のからだを台にして、井戸の外へとびあがって、自分がたすかつたうれしさのあまりに、井戸の底で待つてゐる山羊のことなど、すっかり忘れてしまつて、そこらを跳ねまはつてみました。

山羊は、いつ、引き上げてくれるのかと待つても待つても、あがつた狐が知らぬ顔をしてゐるものですから、中から、声をふりたてて、

「おい、狐君。早く、引っぱつておくれ。さつきの約束を忘れたのか」
と、いひますと、狐は、井戸ばたから、そこをのぞいて、
「そこだよ、君。君のあごに生えてゐる髭の数ほど、きみの頭に智恵があつたら、まさか、
考へもなしに、そんな深い井戸へは、はひるまいよ」
と笑つて、とつとと行つてしまひました。

山羊はうす暗い井戸の底で、今更さら、あごの髭の数をかぞへて見ても、追つつきませんでした。

口語・文語や文体の違いを差し引くとしても、天草・国字の話の内容そのものは比較的近いと言えそうである。井戸の底に取り残された山羊がその後どうなったのか。天草版は何も述べないが、国字本は死んでしまったという。乏しいあご髭をなでて数える新村訳にはユーモアとペーソスがまじる。

2. シュタインヘーベル本羅独版イソップ寓話 (1476年頃ドイツのウルム刊)

シュタインヘーベル本の構成概略は次のとおり。

本稿での略号

「イソップ伝」

第1集	ロムルス第1巻 20話	Rom.1
第2集	ロムルス第2巻 20話	Rom.2
第3集	ロムルス第3巻 20話	Rom.3
第4集	ロムルス第4巻 20話	Rom.4
第5集	選外寓話集 17話	extra. (extravagantes)
第6集	リミキウス 17話	Rim. [St.]
第7集	アウィアーヌス 27話	Avi.
第8集	アルフォンシ&ポッジョ 15&7話	coll. (collecte) [ml. e=ae]

紀元後1, 2世紀に作られたと考えられている「イソップ伝」の後に、寓話部が続く。第1-4集のロムルス集は中世を通じて普及していたラテン語散文イソップ。第5集も中世のもの。第6集は15世紀にリヌッチョ(リミキウス)によってギリシア語写本からラテン語に訳されたもの。第7集は古典期が終わる頃の韻文版で中世を通じて知られていた。第8集は中世からの近世の小話・笑話の雑録⁸。

3. シュタインヘーベル系スペイン語版イソップ寓話 (1546年アントワープ刊)

国字本の「イソップ伝」の冒頭で、戦いが起こってイソップが捕虜となり奴隷としてア

テネの商人に売られたというエピソードもそうであるが、寓話部の第8集 *collectae* の部分で追加された2話も ca.1476年羅独版にはなかったものである。この coll.の部分の寓話の出入りが版によって異なることが少なくない。これは特にポッジョのゴシップ的な笑話の問題視された場合もありそうだし、巻末で他から新たに寓話を追加するのに適当だったためであろう。版の違いが表れやすい箇所であり、翻訳底本を見定める手掛かりにもなる。扱うスペイン語版は以下のとおり。

1489 サラゴサ刊 本稿ではこの版の英訳を用いる。

1521 セビリア刊 ゴシック体活字で豪華本ふう。

1546 アントワープ刊 ローマン体活字。

書誌カタログ *Iberian Books/ Libros Ibericos: Books Published in Spanish or Portuguese or on the Iberian Peninsula Before 1601* (2010) に拠れば、1546年アントワープ刊は2種類ある。No.95: Aesopus. *La vida y fabulas* と No.96: Aesopus. *Las fabulas*. 同じ年に同じ発行元から出ている。これだけのタイトルではわかりにくいだが、No.96もNo.95同様「イソップ伝」を含む。No.96は分量が倍増していて、No.95と東方系寓話集『カリーラとディムナ』の合本とも言うべきものである。「鳩と狐」の話は両方に載る。だが国字下29「出家と狐のこの事」にあたる「司祭とその犬と司教 *del sacerdote, y de su perro, y del obispo*」は、1489サラゴサ、1521セビリア、1546アントワープNo.95にはあるが、なぜかNo.96にはない⁹。したがって国字本は1546アントワープNo.95(ないしこれ以降の版)に拠ったと考えられる。ラテン語版との併用も考えられるが。

国字本は「イソップ伝」で、イソップがアテネの商人に売られたという設定をスペイン語版から受け継いだうえで、さらにイソップが戦争捕虜となったことを明確にする。筋のとおりをよくするために柿の吐却と荷物運びのエピソードを入れ替える。さらにシュタインヘーベル系最後の第8集 *collectae* から5話を「イソップ伝」に移し替えるなどしている。ここには国字本の訳者・編纂者の強い編集意図が表れていると考えられる。以下はこの集の主にポッジョの部分であるが、アルフォンシからの混入もある。

	ca.1476 羅独	1489 サラゴサ	1521 セビリア	1546 アントワープ No.95	国字本伊曾保
Poggio 1	鳩小屋の夫	鳩小屋の夫	鳩小屋の夫	鳩小屋の夫	
2	神様の子	神様の子	神様の子	神様の子	
3	偽善者	悪魔と悪婆	悪魔と悪婆	悪魔と悪婆	
4	不能	仕立屋と弟子	仕立屋と弟子	仕立屋と弟子	
5	愚者	愚者	愚者	愚者	→ 中6 さぶらひ鶺鴒にすく事 [イソップ伝]
6	畸形	犬と司祭	犬と司祭	犬と司祭	→ 下29 出家と狐のこの事
7	犬と司祭	猿とクルミ	猿とクルミ	猿とクルミ	
8		ロバ売り親子	ロバ売り親子	ロバ売り親子	→ 下30人の心の定まらぬ事
9			偽善者	偽善者	
10			不能	不能	
11			畸形	畸形	
			ヴィーナスと鶏	ヴィーナスと鶏	
1546アントワープ刊 No.96, 13章				ライオンと狐	
同17章				鳩と狐	→ 下28鳩と狐の事

上の表はタイトルを略したが、正確には以下のとおり。

ca.1476: 1. De muliere et marito in columbario clauso 2. De muliere puerum pariente gratia divina, marito absente 3. De ypocrita et muliere vidua 4. De juvencula impotentiam mariti accusante 5. Aucupii et venationis studium summa est amentia 6. De monstris aliquibus 7. De sacerdote eius cane et episcopo

1546 アントワープ No. 95 in Iberian Books (2010)

De Poggio. dela muger, y del marido encerrado en el palomar	ポッジョ作。妻と鳩小屋に閉じ込められた夫にこと
Dela muger que pario un niño por la gracia de dios, seyendo el marido absente	夫がいない時に神の恩寵によって子供を産んだ妻のこと
Del Diablo, y dela vieja mala	悪魔と悪い婆さんのこと
Del sastre maestro, y del rey, y de sus criados	仕立屋の主人と王とその使用人のこと
Del loco, y del cavallero cazador	狂人と狩りをする騎士のこと
Del sacerdote, y de su perro, y del obispo	司祭とその犬と司教のこと
Del ximio, y delas nuezes	猿とクルミのこと
Del padre, y del hijo que yuan a vender el asno	ロバを売りに行った父と息子のこと
Dela dueña biuda, y del ypocrita	やもめと偽善者のこと
De una muger que acusava a su marido	夫を咎めた妻のこと
De algunos mostruos que fueron eneste tiempo	近ごろ現れた化け物たちのこと
Dela diosa Venus, y de su gallina	女神ヴィーナスとその雌鶏のこと
Del leon, y del raposo	ライオンと狐のこと
Dela paloma, y raposa	鳩と狐のこと

4. 天草版上巻・国字本とシュタインヘーベル系の対応

本稿の末尾に表1として、シュタインヘーベル系と天草上巻と国字本の対応を表で示す。表は文語祖本説を想定せずに、翻訳過程をイメージして、対応のわかりやすさを優先した。寓話部に関しては、天草版上巻・国字本の関係は以下のように分類できる。

1) シュタインヘーベル系から採られ天草版上巻・国字本の両方にある話

国字中 10-14, 16, 18, 20-28, 30, 32-34, 36, 38 国字下 1, 6, 8 (国字本のみ列挙)

天草版は宣教師とハビアンという日本人が訳したとの説がある。シュタインヘーベル系と天草版(上巻)をもとに国字本が作られたと想定する。底本にラテン語版とスペイン語版が併用されたのか、スペイン語版のみに拠ったのかはよくわからないが、ラテン語版のみとは考えられない。

2) シュタインヘーベル系から採られ国字本にのみある話

国字中 15, 17, 19, 29, 31, 35, 37, 39-40 国字下 2-5, 7, 9-16, 18-33

ただし下 28, 30 はスペイン語版にしか存在しない。天草版にはない話なので、国字本が底本にのみ拠りながら訳したことになりそうである。宣教師などとの共同作業であったろうが、天草版の訳者との関わりなども不明。

3) シュタインヘーベル系から採られ国字本にない話。

天草上 14。 1) と同様の過程で成立したであろう。出産間近の豚に狼が介助を申

し出て断られるという取るに足らない話ではある。

- 4) シュタインヘーベル系以外 (Odo of Cheriton か) から採られ国字本にのみある話
国字下 17, 34。本稿では扱わない。

国字下 13, 22, 32 の採録順が変則的であるが理由は不明。イソップ伝の国字上 2, 3 の順が天草版と異なるが、ここでは天草版の順が底本に忠実なのであって、国字本は編集・整理された結果である¹⁰。第8集の5話が国字本上 13, 15, 16, 中 4, 6 として「イソップ伝」に組み入れられているのと同様の編集意図が働いているとみられる。

5. 中世の伝統を継ぐシュタインヘーベル本からルネサンスのドルプ本への手

掛かり

印刷の揺籃期のシュタインヘーベル本はかなりの数の版画挿絵がちりばめられている。挿絵は子供を引きつける手段としても有効であるが、我々にとっても言葉が難しい時に内容を理解・推測するのに役立つ。ドイツ文学史上『阿呆船』で有名な15世紀ゼバスティアン・ブラントは、シュタインヘーベルの増補版ともいべきものを1505年に出している。挿入された版画が手掛かりとなるが、その増補された部分に天草下に含まれる話が7話確認できる。

たとえば天草下7「陣頭の貝吹き」にあたる話「戦いで捕まったラッパ手 *de tubicine captivo in bello*」が挿画入りで載っている。ネットで公開されている画像はマンハイム大学の *Mannheimer Texte Online* <http://mateo.uni-mannheim.de/desbillons/esop.html> S.328-29 で見ることができる。「ラッパ手」の話は328ページの挿画からはじまる。画の中央に配置されたのがラッパ手で、手にしているのは剣ではなくラッパである。画の下のタイトルに続き韻文訳が先に数行にわたって掲げられる。ヴァッラの訳は329ページの最初のイニシャルから始まる6行半で、その後にブラントによると思われる解説が続く。


戦いで捕まったラッパ手が自分は誰も殺めていないと言うが、味方の軍を鼓舞した罪を咎められる話である。ヨーロッパ中世の進軍ラッパは、戦国時代の法螺貝や古代の角笛と同様である。シュタインヘーベル本は国字・天草上の典拠とされ、その増補版に天草下の話が載っているとすれば、あるいはこれが下巻の典拠かとも思われたが、結局直接の関係はなかった。ブラントは、ヴァッラ訳イソップ寓話を20話ほど訳者名を挙げずに取り入れて、そのうちの7話が天草版にとられたのと同じ話であった。このヴァッラはルネサンス期の古典研究の押しも押されぬ大家で、30代初めにイソップ寓話の33編をギリシア語からラテン語に翻訳している。

ヴァッラをその名とともに知ったのは L.Gibbs の *Aesopica* と題されたページである。L.Gibbs は *Oxford World's Classics* からイソップ寓話の英訳 (2002) を出し、注付のラテン

語イソップ読本を刊行し、ラテン語イソップ寓話を中心とした多くの情報をネットで提供している。彼女が Madrid 版と呼ぶ 19 世初めのラテン語版は、本文そのものはルネサンス期に遡るものようだという¹¹。やや稚拙な感じの同じ版画が繰り返されることがあるが、それはこの版が、話を別々の訳者ごとにまとめて載せ、話の重複をいとわない編集となっており、訳者が違っても同じ話であれば同じ版画を用いているからである。Gibbs が挙げている寓話のタイトルをたどっていけば、芋づる式に天草下に対応する話がすべてとびとびにある程度順を追って出てくる。この 19 世紀版をさらに遡っていくと、16 世紀前半のドルプ本といわれるものにたどりつく。このドルプ本系は初版当初はしばらく話の増減があるようであるが、ある段階でヴァッラの訳が寓話部の巻頭を占めるようになり、さらにギリシア・ラテン対訳 Aldus 版のラテン語部分を無名氏訳として取り込み、リヌッチョ訳の 100 話もすべて含んで、やがてシュタインヘーベルの後継ともいえるべき地位を占めるに至る。シュタインヘーベルが中世のテキストを主体にしたのに対し、ドルプ本はギリシア語写本から訳されたラテン語イソップを中心とし、ルネサンス期の特徴をなすといえる。

75

**DE VULPE,
ET. CAPRO.**



Vulpes, & Caper sitibundi in puteum quendam descenderunt, in quo cum perbibissent, circumspicienti Capro reditum Vulpes ait: bono animo esto, Caper: excogitavi namque quo pacto uterque reduces simus. Siquidem tu eriges te rectum primoribus pedibus ad parietem admotis, cornuaque adducto ad pectus mento, reclinabis: & ego per terga cornuaque tua transilien, & extra puteum evadens, te istinc postea educam. Cujus consilio fidem habeam.

D 2


FABULÆ. 239

fectò fore. Eam Accipiter torvè conspiciens ait: stultus equidem nimium essem, si quem manibus teneo cibum, illum dimitterem amplioris spe pastus.

Adfabulatio.

Fabula significat, quòd, qui omittunt id, quod manu tenent rerum majorum spe, consilio inopes, ac ratione nimium sunt.

De Vulpe, et Trago. 5.



Vulpes, & Tragus sitientes in quemdam puteum descenderunt. Verùm enim post potum cum egressum conspiceret Tragus, Vulpes ei comiter ait: bono sis animo; nam, quid salutis nostræ opus sit, probè animadverti. Si enim rectus stabis, ac pedibus anterioribus, cornibusve muro adhaerebis, cujus ego

(Gibbs がマドリード版と呼ぶ 1815 年のもの。同じ版画を含む例として「山羊と狐」の話を掲げる。左 (p.75) はヴァッラ、右 (p.239) はリヌッチョの訳が挿画の下に続く。テキストそのものは以下で述べる 1536 年版ドルプ本と同じである。挿画は Aldus 版のを模倣したらしい。Æsopi Phrygis, et aliorum fabulæ. 1815.

<https://archive.org/details/sopiphrygisetal00aesogoog>

6. ドルプ本の構成と訳者・翻案注釈者

オランダの人文主義者ドルプ M. Dorp (1485-1525) によって 1509 年に刊行されたイソップ寓話は、所収寓話を増やしながらい長い間版を重ねていく¹²。それはドルプ (本) Dorpius ないしドルプのイソップ Aesopus Dorpii と呼ばれるが、本稿では特に 1536 にリヨンで刊行された『フリュギアのイソップなどの寓話 Aesopi Phrygis et aliorum fabulae』をドルプ本と呼ぶ。この版で以下で述べる *incerto interprete* の 78 話が加わり、天草版所収寓話すべてに対応するようになる¹³。天草はこの版か、これ以降のものを用いたと考えられる。Gibbs がマドリッド版と呼ぶのもこのドルプ系統の終わりのほうのものである¹⁴。

ドルプ本の目次の頁は以下のようなものである。「イソップ伝」など目次から抜け落ちているものもある。最後にエラスムスの名が見え、この後にも収録された他の訳者・作者の名が続くが、天草版下巻とは関係ないのでここでは略す。

F A B V L A R V M Q V A E H O C
in libro continentur interpretes atq; autores.

Laurentius Valla.	Pagina	49
Gulielmus Gudanus.		93
Hadrianus Barlandus.		117
Gulielmus Hermannus.		133
Rimicius.		147
Erasmus.		189

(Aesopi Phrygis et aliorum fabulae, Lugduni (Lyon) 1536 の目次頁の上半分)

この目次に対応させながら、実際にドルプ本に収められていて天草下巻に関係のあるものを整理してみる。人名表記に統一がとれていないか、混乱がある。[]は目次に記載されていないものを指す。{ }は本稿での略記。

所収寓話の訳者・作者

[「イソップ伝」 p.3-44]

- ① Laurentius Valla p.49-64 {Valla} (33 話)
- ② [incerto interprete (訳者不詳 = Aldo Manuzio) p.65-93] {incert.} (78 話)
- ③ Gulielmus [Hermannus] G[o]udanus [= Willem Hermans of Gouda] p.93-116 {Gouda.} (45 話)
- ④ Hadrianus Barlandus p.117-131 {Barl.} (36 話)
- ⑤ [Hadrianus Barlandus (<Avianus)] p.131-133 {Barl.Avi.} (4 話)

⑥ Gulielmus Hermannus [Goudanus] (<Avianus) p.133-146 {Gouda.Avi.} (38話)

⑦ Rimicius (= Rinuccio d'Arezzo) p.147-188 {Rim. [Dorp]} (100話)

Erasmus エラスムス p.189-以下は略。

① 著名なイタリアの人文主義者ヴァッラ Lorenzo Valla (1407-1457) がギリシア語写本から1440年頃訳した33話で、初版は1472年。天草本はここから9話ほどとる。

② 目次には掲載されていない。本文には訳者不詳 *incerto interprete* とある。1505年の Aldo Manunzio によるギリシア・ラテン対訳本のラテン語訳を取り込んだもの¹⁵。天草版はここから18話ほどとる。

③ 中世の韻文ラテン語イソップ寓話を Gouda 出身のラテン語教師 W. Hermans が散文パラフレーズしたもの。本稿では Goudanus と呼ぶ。

④ ベルギーのラテン語教師 Barlandus による散文要約・翻案のようなもの。

⑤ Barlandus によるアウィアーヌスの散文パラフレーズ。

⑥ Goudanus によるアウィアーヌスの散文パラフレーズ。

⑦ リヌッチョ (Rimicius) がギリシア語写本から1448年頃訳した100話。リヌッチョはかつてヴァッラのギリシア語の教師だったが出藍の誉といふべきか。初版は1474年ミラノ。シュタインヘーベルはこれから17話を取り、ドルプは100話すべてを載せる。本稿ではシュタインヘーベルにとられた話の順は Rim. 3 [St.]のように示したが、これは Rim. 5 [Dorp]とおなじ話になる。

ギリシア語写本に基づいたルネサンス期に特徴的なのはヴァッラ、アルドゥス (Aldo Manunzio)、リヌッチョであり、残りは中世ラテン語版の翻案注釈といったものになると思われる。

寓話に関して15世紀の画期的な出来事はイソップのギリシア語テキストの発見であった。ビザンツ帝国からイタリアにテキストがもたらされ、それがラテン語に翻訳されることになる。15世紀前半にイタリアの人文主義者たち間で始まった翻訳の大半は手書きのまま残されるが、そのなかでリヌッチョ (1395—1457) とヴァッラ (1407—1457) による訳は、その後印刷されてイタリア以外にも知られ、他のヨーロッパの言語にも訳される。寓話はこうしてギリシア語教育の手段として用いられるだけでなく、機知とスピーディな語り口を特徴とする文学の一ジャンルとして確立していく。

15世紀半ばに印刷術が発明され、その第3四半期世紀にはドイツのシュタインヘーベルが中世を主体としつつ人文主義者のリヌッチョ訳を取り入れたものが、16世紀半ばころまで影響を及ぼすが、ルネサンス・人文主義の流れのなかでこの頃フランスで現れたドルプ版がその後これにとってかわる。パリ刊のあとのリヨン刊が南欧のイタリア、スペインへと広まる。そしてこの中世から近世への流れ、シュタインヘーベルからドルプへの流れは、

我が国にもおよび、天草上巻と国字本がシュタインヘーベル系に拠ったのに対して、天草下巻はドルプ本を底本としているのである。

7. 天草版下巻とドルプ本の寓話の対応

本稿末の表2で、左欄が天草下巻、右欄がドルプ本。天草版とドルプ本で対応する話を線で結ぶ。天草版の1話にドルプ本内の話が複数対応するものがある。天草下30話あたりまでをVallaから始めてRim.まで、所々前後することがあるが、ほぼ順に飛び飛びに採っている。その後再びVallaに戻って同様に15話ほどを採ったとみられる。天草下28-31などはRim.と他の訳者が重複して訳している話が続いており、これが何かのきっかけとなって再びVallaへ戻って再度採りなおしているようにも感じられる。全体としてVallaとincerto interpreteからの話が比較的多く、Barlandusはわずかである。なおincerto interpreteはAldus版のラテン語部分であり、これはギリシア語対訳で、ほぼ逐語的というに近い語順のようである。

同じ話でありながら複数の訳者にまたがっている話については、関連の度合いはさておき、とりあえず確認できた範囲ですべて線で結んでみた。またSteinhöwelの欄には、これまでシュタインヘーベルに拠ったと考えられてきたものについて対応する箇所を記した。タイトルが同じか似ているかしても話が違う場合もままある。漏れているものも若干あるかもしれないが、天草下とドルプ本の関係はおおよそ見てとれるだろう。

ドルプ本で同じ話が違う訳者で重複して出るのは、天草下にとられた45話に限れば、約3分の一ほどである。下7「陣頭の貝吹き」や下38「パストル」はValla, Barlandus, Rim.の3重複である。重複する話を天草下がどう取り入れていったかは場合により異なるようで、どれか一つの訳者から採ることもあれば、複数から拾っていくこともある。ドルプ本の中での話の重複のほか、厳密にはドルプ本とシュタインヘーベル本の話の重複も一応考える必要があるが、一瞥する限りでは関係はなさそうである。

問題なのはむしろ天草下の中で唯一、或いはただ二つ国字本と共通するとみなされてきた話である¹⁶。それは「狐と野牛」天草下30・国字下14であり、「鷺と鳥」天草下29・国字下12である。これについては詳しく考察することとしたい。

8. 山羊のあご髭ほどの知恵

「狐と野牛の事」天草下30 / 「野牛と狐の事」国字下14

ドルプ本 Valla 1; Rim. 5 [Dorp] / シュタインヘーベル本 Rim. 3 [St.]

この話は天草下の45話のうち国字本と共通する唯一の、或いはただ二つのうちのひとつ

とみなされてきた。野牛は山羊のことである。シュタインヘーベル本 Rim. 3 とドルプ本 Valla1 のこの話を比べてみる。話の収録順からして前者が国字本、後者が天草版のもとになっていると予想はできる。ただしシュタインヘーベル本 Rim. 3 はドルプ本にも Rim. 5 [Dorp]として入っているので収録順に拠る速断は避けねばならない。この話の場合は「下心」に対応する後置教訓を含めて天草版が Valla 1 をほとんど忠実に訳をしているのが明らかなので、まず Valla の原文とできるだけこれに沿った訳を挙げ、次に天草版を引いて比べてみる。¹⁷。

Valla1

de vulpe et capro

狐と山羊のこと

Vulpes et caper sitibundi in puteum quendam descenderunt: in quo cum perbibissent,

狐と山羊が 喉が渴いて とある井戸の中へ 降りていった そこでたらふく飲んで

circumspicienti capro reditum, vulpes ait: Bono animo esto, caper: excogitavi namque quo pacto

探している山羊に² 出口を¹ 狐が言った 元気をだせ、山羊くん、考えついたぞ、どのようにしたら

uterque reduces simus. Si quidem tu eriges te rectum, primoribus pedibus ad parietem

二人とも無事に戻れるかを もし君がまっすぐに立って 前足を 壁に

admotis, cornuaque adducto ad pectus mento, reclinabis: et ego per terga cornuaque tua

掛けて 角を² 顎を胸のほうへ引いて¹ 傾けたら そしたら僕が 君の背中と角を

transiliens, et extra puteum evadens, te istinc postea educam. Cuius consilio fidem habente

飛び越え 井戸の外へ出て それから君をここから引きだそう この計画を 信じて

capro, atque, ut illa iubebat, obtemperanti, ipsa a puteo resiliit: ac deinde pre gaudio in

山羊が 狐の命じたとおりに従うと、 狐は井戸から跳んで出た それから嬉しさのあまり

marginem putei gestiebat exultabatque, nihil de hirco cure habens. Ceterum cum ab hirco, ut

井戸べりで 大喜びして飛び跳ねていた² 全く山羊のことは考えもせず¹ それに 山羊から

foedifraga incusaretur, respondit: Enimvero, hirce, si tantum tibi esset sensus in mente,

約束破りと非難されると 答えた それにしても山羊くん もし 君の頭の中にあつたとしたら²

quantum est setarum in mento, non prius in puteum descendisses, quam de reditu exploratum

君の顎の髭ほどでも¹ 井戸の中へ降りてきたりはしなかつたらう⁴ 戻れると確信できないう

habuisses. Adfabulatio. Haec fabula innuit, virum prudentem debere finem explorare,

ちに³ 寓意 この話は教える 分別のある者は 結末を見通すべきであると²

antequam ad rem agendam veniat.

事にあたる前に¹

天草版

狐と、野牛の事

狐と、野牛大きに渴して、或る井の中へ連れ立つて入つて、思う儘に飲むで後、上らう様が無かつたところで、種々に思案をしてみたれども、別にせう様も無うて、狐野牛に力を添えて言ふは、「いかに野牛殿お氣遣ひあるな、二人共に恙無う上る道を巧み出した、先づ御辺伸び上つて前足を井の側に投げ掛け、頭をも前へ傾けてござれ、某それを踏まえて先へ上つて、又御辺をも引き上げうずる」と言ふ、野牛「この儀げにも」と領掌して、その言ふ儘にしたれば、狐飛んで井桁の中に飛び上つて跳ねびちたいて喜び、余りの嬉しさに野牛のことをばはたとうち忘れた。野牛はいつ引き上ぐるぞと待てども待てども、狐は知らぬ顔して居るによつて、野牛罵つて言ふは「やあ貴所は約束は忘れたか」と問うたれば、狐「そのことちや、御辺の頤に有る鬚の教程、頭に知恵が有るならば、遠慮も無う井の中へははひるまいぞ」と言うて嘲つた。

下心。賢い人の俗ひには、先づ事を始めぬ前にその終りを見るものちや。

天草・国字・シュタインヘーベル本 *Rim.*・ドルプ本 *Valla* の本文の関係を整理してみる。

1) 天草版が *Valla* に付け加えた箇所

天草版はこの話ではほ *Valla* に忠実に訳しているが、「野牛はいつ引き上ぐるぞと待てども待てども、狐は知らぬ顔して居るに因って」は付け加えた部分である¹⁸。

2) 天草版が *Rim.* ではなく *Valla* に拠ったと判断できる箇所

a) 井戸の中で狐が山羊に指示を出す場面

Valla が *Rim.* より詳しく、天草は *Valla* に近く、国字は *Rim.* よりもさらに簡単な表現になっている。すなわち *Valla* の *Si quidem tu eriges te rectum, primoribus pedibus ad parietem admotis, cornuaque, adducto ad pectus mento, reclinabis* 「お前が前足を井戸の内側に掛けてまっすぐ立ち、顎を胸の方へ引いて角を傾けたら」という表現から「顎を胸の方へ引いて」を略し、角を頭に変えれば、ほぼ天草の「御辺伸び上つて前足を井の側に投げ掛け、頭をも前へ傾けてござれ」という表現になる。ここで *Rim.* は手順がもっと簡単で *pedibus anterioribus cornibusve* 「前足か角を」かけとなり、国字はさらっと「御辺せいを伸べ給へ」ですませている。

b) 狐が井戸から出て喜ぶ場面

Valla の *pre gaudio...gestiebat exultabatque* 「大喜びしてはねまわる」という表現を天草の「跳ねびちたいて喜び、あまりの嬉しさに」はうまく写している。この箇所では *Valla* が拠ったギリシア語原文はただ「喜んで」とあるだけである¹⁹。原典ではさほど強調されるわけではない狐の喜びを、*Valla* が強調して、天草がこれに倣ったのに対し、*Rim.* や国字本には狐の喜びを表現する語句は全くない。「はねびちたいて喜ぶ」というのは現代では

「飛び上がって喜ぶ」に相当しそうである。狐はヤギの背中に跳び上り、井戸から跳び出て、跳び上がって喜んだのである²⁰。

c) 狐が山羊のことをすっかり忘れてしまう場面

Valla の nihil de hirco curae habens 「ヤギのことは全然気にもかけず」という表現を天草は「野牛のことをば、はたとうち忘れた」と正確に訳すが、Rim. と国字にはこれにあたる語句はない。この語句はもとのギリシア語にはなく Valla が付け加えたものである²¹。したがって、Valla と Rim. のギリシア語底本の違いも考慮する必要があるかも知れないが、Rim にこれに相当する部分がないのは当然であり、国字本が Rim に拠っているとすれば、国字本にないのも当然だということになる。たまたまそうであった可能性もなくはないが、もとのギリシア語原文にない語句を Valla が付け加え、これを天草版が忠実に写して、Rim. と国字本にないということは、かえってそれぞれの翻訳と底本のつながりを示すことになるだろう。

3) 国字本が省略・追加した箇所

狐が助けてくれないと山羊が非難する場面は Valla, Rim. 天草に共通してあるのに国字にはない。逆に国字が付け加えた箇所としては「ふたりながら、この井桁の中にて死なんも、はかなき事なれば」「『なにとしてかは御辺を引き上げ奉らんや。さらば』とて帰りぬ。野牛、空しく井のもとに日を送りて、つゐに、はかなくなりけり」が挙げられる。

4) 国字本が Valla ではなく Rim. に拠ったと考えられる箇所

Valla にはないが Rim. にある表現で国字がそれによったと思われる箇所をあえて探してみる。Rim. の te manu comprehendens を国字が「御辺の手を取て」と訳したのがわずかなその痕跡だとすることができるかもしれない。

国字本

ある時、野牛と狐と、渴に望て、井桁のうちにおち入て水を飲み終つて後、あがらんとするによしなき狐申けるは、「ふたりながら、この井桁の中にて死なんもはかなき事なれば、謀をめぐらして、いざやあがらん」とぞいひける。野牛、「もつとも」と同心す。狐申けるは、「まづ御辺せいを伸べ給へ。其せなかにのぼりて上にあがり、御辺の手を取りて上へ引き上げ奉らん」といふ。野牛、「げにも」とてせいを伸べける所を、狐そのあたまを踏まへて上にあがり、笑つて云、「さてもさても御辺はおろかなる人かな。その鬚ほど知恵を持ち給はば、われいかなせん。なにとしてかは御辺を引き上げ奉らんや。さらば」とて帰りぬ。野牛、空しく井のもとに日を送りて、つゐに、はかなくなりけり。

其ごとく、我も人も難儀にあはん事は、まづわが難儀を遁れて後、人の難をも除くべし。わが身地獄に落ちて、他人楽しみを受くればとて、わが合力になるべきや。これを思へ。

Rim. 3 [St.]

Vulpes et hircus sitientes in quendam puteum ut sitim extinguerent descenderunt, (...) ei facete vulpecula inquit : Si ea, caper, sapientia peditus esses, quo pilorum ornatu istec tua barba referta est, non prius in puteum descendisses, quam egressum pensiculate vidisses. Significat ergo fabula, quod prudentes prius finem rei prospiciunt, quam opus inierint.

(本稿5節の右の図版参照。St.とDorpで若干語句の違いがある。ここでは前置教訓を省き、寓話本体部分の最初と最後および後置教訓のみ引いた。)

VallaとRim.の後置教訓は語彙は異なるとはいえ内容は一致している。これを天草版は忠実に訳している。これに対し国字本の教訓は全く異なる。国字本の訳者自身が導き出した教訓であろう。

Adfabulatio. Hac fabula innuit, virum prudentem debere finem explorare, antequam ad rem agendam veniat. (Valla)

Significat ergo fabula, quod prudentes prius finem rei prospiciunt, quam opus inierint. (Rim. 3 [St.])

Fabula significat, quod homines consilio praediti, rerum fines prius inspiciunt, quam dent operam rebus gerendis. (Rim. 5 [Dorp])

下心。賢い人の俗ひには、先づ事を始めぬ前にその終りを見るものぢや。(天草版)

其ごとく、我も人も難儀にあはん事は、まづわが難儀を遁れて後、人の難をも除くべし。

わが身地獄に落ちて、他人楽しみを受くればとて、わが合力になるべきや。これを思へ。

(国字本)

「狐と野牛」の話は天草下と国字で共通するほとんど唯一の話とみなされてきて、両方ともシュタインヘーベル本 Rem. 3 に由来すると考えられてきた。しかし以上の考察から、国字下14「野牛と狐の事」はシュタインヘーベル本に拠ったが、天草下30はドルプ本 Valla 1 をかなり忠実に訳したと断定できるだろう。

9. 子羊をさらう鷲に憧れたカラス

「鷲と鳥の事」天草下29 / 国字下12

ドルプ本 Barlandus 18; Rim. 2 [Dorp] / シュタインヘーベル本 Rim. 1 [St.]

上で見た「狐と山羊」の話は、国字本と天草版下巻とに共通する唯一の話とされてきた。この話のほかに、国字下14と天草下29の「鷲と鳥」も共通する話と考えてよい。内容は似ているには似ているが、変更ないし脚色がかなり大きいため別バージョンとすることもできるか。原典に忠実な訳はともかく、翻案に近いものなどが加われば、系統をたど

っていくことは複雑な作業になる。ただこの話に関しては、翻訳・底本4つの版にはかなりはっきりした関係がたどれる。

天草版

ある鷲巖の上から羊の居る上に飛び来れば、鳥これを羨みて、曝いて置いた羊の皮の上に飛んで来たによつて、足に掛つて飛ぶことを得なんだところを子どもその儘寄つて捕へた。下心。我が身に無いところを顧みず、他の徳を構へて羨むなということぢや。

ドルプ本 Barlandus 18

鷲が高く聳える岩山から仔羊の背後を襲う。これを目撃したカラスが鷲の猿まねをして、羊の皮衣めがけ急降下。降りたところで足を取られ、取られた足が絡まり捕まり、捕まったあげくに子供のなぶりもの。(後置教訓部分は原文・訳とも略)

ドルプ本 Barlandus 18

Rupe aeditissima in agni tergum devolat aquila. Videns id corvus, imitari, velut simius, gestit aquilam, in arietis vellus se demittit, demissus impeditur, impeditus comprehenditur, comprehensus projicitur pueris.

国字本

ある鷲、餌食のために羊の子を掴み取つて食らふ事ありけり。鳥これを見て、「あなうらやまし。いづれも鳥の身として、なにかはかやうにせざるべき」と我慢おこし、「我も」とて、野牛のあるを見て掴みかゝりぬ。それ野牛の毛は、縮みて深きもの也。かるがゆへに、かへつてをのれが臍をまとひてばためく所を、主人走り寄つて鳥を取りて、「奇怪なり。いましめて命を絶つべけれども」とて、羽を切つてぞ放しける。ある人、かの鳥にむかつて、「汝は何者ぞ」と問へば、鳥答云、「きのふは鷲、けふは鳥なり」といへり。

そのごとく、我身のほどを知らずして、人の威勢をうらやむ者は、鷲のまねをする鳥たるべし。

シュタインヘーベル本 Rim. 1 [St.]

鷲が高い岩山から飛んで来て、群れの中から子羊をさらっていった。これを見た鳥が激しい競争心に駆られて、羽をばたつかせ牡羊の上に飛び降りたが、羊の毛に爪が絡まり、羽ばたいても脱け出せなくなってしまった。羊飼いが絡まっている鳥を見て、駆け寄っていつて捕まえ、風切羽を切つて子供らに慰みものとして与えた。しかし、いったい何という鳥かと聞かれると、カラスは答えた。「前には鷲のつもりでいたが、今では自分がカラスだとよくわかった」(後置教訓部分は略)

シュタインヘーベル本 Rim. 1 [St.]

Aquila celsa ex rupe evolans, agnum ex omni grege arripuit, quam rem cum corvus conspicatur emulatione motus vehementi cum crepitu ac stridore devolat in arietem, atque unguis in arietis vellus ita implicat, quod inde etiam motu alarum se explicare non potest; hunc pastor cum ita implicitum videt, accurrens corvum comprehendit atque alarum pennis incisis pueris suis pro ludibrio dedit. Verum enim cum quispiam corvum rogaret, que nam volucris esset, corvus ait: Prius equidem quoad animum aquila fui, nunc vero me corvum esse certo cognosco. Fabula significat, quod qui supra vires quippiam audet, hoc solum efficit, quod in adversa sepius incidit ac se vulgo ridiculum exhibet.

天草版はドルプ本 Barl.から、国字本はシュタインヘーベル本 Rim.から採っているのは明らかである。そもそも Barl.は Rom.や Valla や Rim.に基づいているとされる²²。この話の場合は Barl.は Rim.に基き、これを半分ほどに圧縮したと考えられる。したがって「鷲と鳥」は一方で Rim.訳の成立→シュタインヘーベル本に採られる→国字本の流れがあり、もう一方で Rim.訳の成立→Barl.に拠る圧縮→ドルプ本に採られる→天草版の流れがあったと推測できる。したがって天草版と国字本の「鷲と鳥」は本は同じだが経路が異なる二つのバージョンとみなすのがよいだろう。

Barl.はこの話で分詞を多く用い、前置詞の使用は2か所だけで、圧縮された感じの文体だと思われる。国字本に「野牛（山羊）の毛は、縮みて深きもの」とあるのは羊の毛のことだろうから、江戸初期の日本人にとって羊と山羊は想像上の動物だったのかもしれない。Barl.ではカラスが跳びかかるのは羊の皮となってユーモアが醸し出される。このことも天草版には受け継がれている。いっぽう Rim.では羽を切られておかしい姿になった鳥が何者かと訊かれて、「さっきまで心では鷲だったが、今では自分が鳥だとよくわかった prius equidem quoad animum aquila fui, nunc vero me corvum esse certo cognosco」と答えが振るっている。国字本がこれを受けて「きのふは鷲、けふは鳥なり」と簡潔な答えにしたのは見事というべきだろう。

10. 空を飛びたがる亀を鷲がつかんで

「亀と鷲」天草下 25 (←ドルプ本 incerto interprete 12 + Goudanus <Avi.> 2)

天草版はこの話で incert.と Gouda.の両方から切り貼りするように採り、亀と鷲の会話部分を増やして直接話法で表現する。太字が共通すると考えられる箇所。後置教訓は略。天草版で創作された空の高みでの会話のやりとりはなぜか臨場感がある²³。

incerto interprete	天草版	Goudanus
亀が鷺に飛びかたを教えてくださいよう頼んだ。	ある亀飛びたい心が付いて、鷺のもとに行つて、「飛ばうずる様を教へさせられい。	亀はのろまな歩みに嫌気がさした。誰かが空へ連れて行ってくれるなら、
鷺はしかしそれは亀の本性に悖ることだと忠告するが、亀は懇願してやまない。	お礼には名珠を奉らうずる」と云ふによって、	紅海の真珠を約束するんだが…
そこで鷺は亀を爪で掴んで天高く持ちあげて	鷺はかいつかうで雲まで上って	亀を持ち上げたのは鷺
	「望みは達したか」と云へば、「なかなか、今こそ望みは達したれ」と云うほどに、	
	「さらば約束の珠をくれい」と言へば、与へうずる珠がなうて、	報酬を要求するが、持ち合わせぬ亀を
離すと、	無言するによって、	鉤爪で刺し貫いた。星が見たいと切に願った亀は、こうして星に囲まれて生を終えた。
亀は巖の上に落ちて 砕けた	岩の上に投げ掛けて 殺いてくらうた。	

incert. 12

Testudo orabat aquilam, ut se volare doceret. Ea autem admonente procul hoc a natura ipsius esse, illa magis precibus instabat. Accepit igitur ipsam unguibus et in altum sustulit: inde demisit: haec autem in petras cecidit, et contrita est. .

Gouda.Avi. 2

Ceperat testudinem taedium reptandi. Si quis eam in coelum tolleret, pollicetur baccas maris rubri. Sustollit eam aquila, poscit praemium. Non habentem, fodit unguibus. Ita testudo, quae concupiit videre astra, in astris vitam reliquit.

11. 進軍ラッパの罪

「陣頭の貝吹き」天草下7 / ドルプ本 Valla 9, Barlandus 10, Rim. 46 [Dorp]

この話はドルプ本に3種ある。Valla, Barl. Rim.の寓話本体部分には違いはあまりないが、後置教訓に違いが大きい。教訓はVallaにはなく、Barl.は寓話本体部分よりも長大で、Rim.は最後の一文がそうである。VallaとRim.はギリシア語写本からであるが、Barl.はこの両者に依存していると考えられる。

結論を先に言えば、「陣頭の貝吹き」に関しては、Valla, Barl., Rim.の三つの訳文に大きな違いはないが、語彙と表現を詳しく見ると、天草版ではこのすべてが参照された可能性が大きい。特に、寓話本体はVallaが、下心はRim.がかなり忠実に再現され、Barl.からはわずかに「角(笛) cornu」を「(ほら) 貝鐘」に置き換えて採るのみで、これに「悲しうで」とか「家の役なれば」といった独自の若干の表現を多少付け加えている。似た3種の寓話本体をここに全て引用するのは煩雑になるので、まず天草本のテキストを挙げ、続いていま上に述べた部分を中心に3種の訳から切り取って再現してみる。

天草版 陣頭の貝吹きの事

或る時この役者敵から生け捕りにせられ、忽ち誅罰を加へうずるとするに、かの者声を上

げて悲しうで言ふは、「いかに人々我には罪も無いに、なぜに殺さうとはさせらるぞ？
その子細は、我はこの年月人を害する事も無し、ただ出陣の時、貝を吹くこと、これ家の
役なれば勤むるまでぢや？ 更に面々に仇を成すことは無い」と。敵方これを聞いて言ふ
は、「それによつてこそ猶殺さうずることなれ。それをなぜにと言ふに、おのれは戦場に
出て、楯鉾を取つては働かねども、貝鐘を鳴らせば、味方の勇気に力を添へて戦ひに進む
ものなれば、赦免することは有るまじい」と言うて殺いた。
下心。 仮令その身は犯さずとも、罪を勧むる題目となる者は、凡人よりも重罪に附せう
ずることであ。(ママ：ぢや？；ことであ)

Valla 9

Erat tubicen quidam, qui in militia signum caneret : is interceptus ab hostibus, ad eos qui
circumsistebant, proclamabat, Nolite me viri innocentem, innocuum, insontemque
perimere : nullum enim unquam occidi: quippe nihil aliud quam hanc buccinam habeo. Ad
quem illi vicissim cum clamore responderunt, Tu vero hoc ipso magis trucidaberis, quod
cum ipse dimicare nequeas, caeteros potes ad certamen impellere.

ラッパで戦いの合図を告げるのを軍務とするラッパ手がいた。敵によって味方から引き
離されると、ラッパ手は周りを囲む敵に向かって大声で、「無実で、無害で、無辜の私を殺
さないでくれ。これまで私は誰も殺したことはない。このラッパのほかには何も持って
いないではないか」と叫ぶと、敵方は彼にこう叫んで答えた。「だからこそ、お前を八つ裂き
にしてやるのだ。自分では戦えないのに、他の者たちを戦いに駆り立てることができるの
だからな」

Rimicius 46

Fabula significat, quod graviori poena sunt iudicandi, qui cum ipsi injuriam non agant,
alios ad injuriam agendum impellunt.

この寓話の意味するところは、自分自身は不正を犯さなくても他の者たちに不正を犯す
よう駆り立てる者らは、より重い罪に問われるべきだということ。

Barl.からはわずかに「お前のその角笛で cornu ist(h)oc tuo」という表現を「貝鐘を鳴らせ
ば」にうつしたかも知れない。西欧の角笛は我が国の法螺貝にあたるだろう。先に挙げた
ブラント版に挿入されたモダンな感じのする版画ではラッパであったが。

以下に天草版の後半部分を挙げ、その下に3種の訳からばらばらにミックスして引いて
みる。実線は Valla、点線は Bal.、破線は Rim.である。

「それによって こそ、なほ 殺さうずることなれ。

hoc ipso magis trucidaberis,

それをなぜにといふに、[ども*] おのれは 戦場に出て、楯鉾を取っては 働かね ども*、

quod cum* ipse dimicare nequeas

貝鐘をならせば、味方の 勇気に力を添へて、 戦ひに 進むものなれば、

cornu aliorum excitas, evibrasque animos ad certamen impellere

下心。 [ものは*] たとひ、 その身は [罪を] 犯さずとも、

Fabula significat, qui* cum ipsi injuriam non agant,

[他人に] 罪を勧むる題目となる ものは*、犯人よりも重罪に 附せうずることである。

alios ad injuriam agendum impellunt graviori poena sunt judicandi,

敵兵がラッパ手に向かってその罪を説明する天草本の箇所「それによってこそ、なほ殺さうずることなれ。それをなぜにといふに、おのれは戦場に出て、楯鉾を取っては働かねども」は、「楯鉾を取っては」はないが、ほとんど語順の点でも Valla と一致する。*を付した cum と qui はそれぞれ従属接続詞と関係代名詞で、これはラテン文でも英文などと同様冒頭に出るが、邦訳では「ども」「ものは」として文末に置かざるを得ない。ラテン文の cum+接続法で譲歩を表す表現は、古文の逆説条件として「働かねども」「たとひ...犯さずとも」に写し取られ、injuriam（不正を）は「罪」と訳され、graviori poena（より重い罰で）に含まれる比較級も「犯人よりも重罪」に反映し、judicandi（判決を下されるべき）という未来受動分詞のニュアンスも、態の違いはあるが「附せうず」の「うず」という当然・適當の意を表す助動詞にうつされている。

12. 中世アラブの蒼鷺から江戸の植木に巣くう鳩

「鳩と狐」国字下 28（←シュタインヘーベル系スペイン語版←アラブ圏）

この 12 節から 13 節まで、国字本がシュタインヘーベル系スペイン語版を参照している根拠を述べる。その第 8 集の collectae にスペイン語版から「鳩と狐」が加わったことは本稿末尾の表 1 のとおりである。これについてはかつて論じたことがあるが、ここでは、アラブ圏から 13 世紀のスペイン語版に入ったらしい「鳩と狐とアオサギ」の会話の部分に初めに継ぎ足した訳を掲げる。狐に騙された鳩に助言するのがアオサギという設定

となっている。

狐はアオサギに声をかけた。「やあ、今日は。ここで何をしてるんだい。君に尋ねたいことがあってきたんだが、何かわかるかな。君がどんな天変地異からも身を守ることができるなんて聞いて、それを教えてもらいにやって来たんだ。」アオサギは答えて「ぼくに何を教えろと言うんだい。」狐は尋ねて「脚が冷えるときはどうしたらいいんだい。」「脚を片方上げて懐へ入れるんだ。温まったらその脚を降ろして、今度はもう一方の脚を懐へ入れる。そうすれば大丈夫だ。」

これに続く部分を1546年版から挙げる。

「もうひとつ教えてくれないか。風が右から吹くときには首をどっちへ向けて寝ればいいんだい」「左の羽の下に入れて寝ればいい。風が左から吹いてくれば、右の羽の下に入れればいい。」

以下国字本で続ける。大系本の注に日葡辞書からとして「反リヲサス。鳥がその頭を翼の下に入れるとか、あるいは頭を羽にもたせかけるとかして眠る」とある。

「前より風吹く時は、うしろにかへりをさし候。うしろより風吹く時は、前ににかへりをさし候」と申。狐申けるは、「あつぱれその事自由にし給ふにおゐては、誠に鳥の中の王たるべし。たゞし、虚言や」と申ければ、かの鳥、「さらばしわざを見せん」とて、左右に頸をめぐらし、うしろをきつと見る時に、狐走りかゝつて喰らい殺しぬ。

13. 「イソップ伝」冒頭の地名 ヨーロッパ、フリュギア、トロイア、アテネ

イソップ伝の冒頭でイソップの出身地を説明する一文もよく比べてみれば示唆に富む。

羅 *natione Phrygius, ex Ammonio Phrygie pago*

国はフリュギア、フリュギアの小村アンモニウムの出で

独 *uß der gegent Phrigia, dar inn Troya gelegen ist, von Ammonio wyler (Weiler)*

フリュギア地方——トロイアがある——の小村アンモニオの出で

西 *En las partes de Frigia, donde es la muy antigua ciudad de Troya avia una villa pequeña llamada Amonia* とても古いトロイアの町があるフリュギア地方にアモニアと呼ばれる小さな町があった

天草 エウローパのうちヒリジヤといふ国のトロヤといふ城裡の近辺にアモニヤといふ郷がおぢやる

国字 エウラウパのうちヒリジヤの国トロヤと云所に、アモウニヤと云里有

フリュギアは近世ヨーロッパでそう馴染みのある地名ではなかったのだろう。シュタイ

ンヘーベルは独訳で——序文で自らの訳について述べているように——わかりやすくするために「そこはトロイアがあるところだが」を付け加えている。スペイン語ではさらに丁寧な「とても古い」という形容が加わる。トロイアも安土桃山時代の日本人には初耳であったろうから、邦訳では「ヨーロッパの」という形容がさらに加わる。天草版にかかわる宣教師は、ともに翻訳に携わる日本人に、遠い昔の町トロイアを舞台にしたイリアスのアキレスの武勲を話して聞かせたかもしれない。架空の町アモニアの町の位置の設定では、天草版はまだ原文に近いが、国字本は端折ってトロイアの町の中に入れてしまった。ほかでも見るように国字本には簡潔に整然とまとめようとする編集意図が感じられる。トロイアという地名が、ラテン語版になくスペイン語版で付け加わったことから、天草・国字ともこのあたりはスペイン語訳に拠ったであろう。

「イソップ伝」は、これに続きイソップの容貌と才智について述べた後、ラテン語版にない説明をスペイン語版が付け加える。「彼はやがて捕らえられ、他の国に連れて行かれて、アリストスという名のアテネの裕福な商人に売られた」と。この部分は天草版にはない。ここで国字本は、状況をさらに具体的に説明しようとしてか、戦いが起こったのだとさらに補足する。「その里に戦ひおこつて、他国の軍勢乱れ入、彼イソボをからめ取て、はるかによそ聞えけるアテエナスと云国のアリシテスと云人に売れり」ラテン語版からスペイン語版を経て国字本に至る流れの中で、少しずつ状況説明の脚色が加わり筋道がはっきりしてくるといふ一面はある²⁴。『絵入卷子本』で他国の軍勢は「唐風の武人装束」になっている。

El qual a pocos dias fue preso y captivo y traydo en tierras estrañas: y fue vendido a un ciudadano rico de Athenas llamado Aristes. (1546)

He was soon captured and removed to a foreign country, where he was sold to a rich citizen of Athens named Aristes. (1489 版の英訳)

14. 文語祖本説の由来

文語祖本説を検討するにあたり、少し詳しくその展開をたどってみたい。新村は初め「西洋文学翻訳の嚆矢」(明 44) で、ロドリゲス『日本大文典』に載る伊曾保の例文は「文禄本[天草版]に因つたに違いない」としていたが、後に「伊曾保物語の旧代和本」(1928; 昭 3) では「私の考では、文禄本はラテンの原本から口訳したのではなくて、その以前に或いは既に存在したかも知れぬ所の文語訳本の一異本に基いたのであるかも知れない」と述べるようになる。考えが変わったのは『大文典』に引用されている天草版からのいくつかの引用が少し違って文語がかったことが理由のようだ。ポルトガル語原文の『大文典』のあちこちに散らばるローマ字で綴られた天草版の例文の中に——出典表記があるにせよ、

また既に天草版を自分で翻字していたとはいえ——文語らしい例を発見したのは奇妙な驚きだったであろう。土井忠生による『大文典』の邦訳は1955年まで待たなければならなかった。おそらくこの大文典の邦訳を契機に、次節で扱う国語国文研究者による4分類法が生じたと思われる。

15. ロドリゲス『日本大文典』の文語20余例とその四分類の意味

『大文典』に載る伊曾保の例文を分類したのは新村出・柗源一校註『吉利支丹文学集』2（日本古典全書1960、後に東洋文庫1993所収。本稿での引用頁は後者より）が初めてであろうか。これによれば、天草版の口語60例あまりのほか、国字・天草からあわせて文語体のものが21例あるとされる。この分類法が、例文数に多少の違いはあるが、その後今日に至るまで引き継がれているとあってよい。

新村・柗 1960 [1993, p.210] 土井 1963, p.62 森田 1965, p.24

文語例の総数	21	21	24
① 国字本のみにあるものから	6	7	7
② 天草・国字両方にあるが国字本から	8	10	10
③ 天草・国字両方にあるが天草版から	1	1	2
④ 天草本のみにあるものから	3	3	5

（「ある」というのは「近似するもの」を含む）

数字のばらつきがあるは口語文語の境が微妙な場合があることにもよるだろう。また三者ともそれぞれにいくつかの例文を挙げはするが、網羅して挙げているわけではない²⁵。

①「国字本のみにあるものから」から文語7例が採られたということは、国字本のこの例文を含む話に対応する話が天草版には存在しないというだけのことである。②「天草・国字両方にあるが国字本から」文語10例が採られたというのは、話は両方に含まれるが、国字本が文語体であり、天草版が総じて口語体であるのだから、いまここではなんら問題ではない。③「天草・国字両方にあるが天草から」文語1、2例が採られたというのは、天草版が総じて口語体であるのに、そのなかにあつて文語らしい例ということになる。国字本がこの箇所で行っているのかも含めて検討する。④「天草本のみにあるものから」3例というのは、この話が国字本に含まれておらず、つまりは天草版のなかの文語らしい例ということになる。

①②はなんら問題ではなく、問題は③④である。この4分類法で、数字に矛盾がなく例文の取り上げ方が的確であると思われるのは『大文典』の訳者でもある土井の記述である。土井が③④に焦点を絞って論じているのは的を射ているが、ただその扱い方には問題が残ると思われる。森田は③にあたるものを2例とするが、土井と同じ1例を挙げるのみであ

る。

多少煩わしくはあるけれども、祖本説に関連して重要な点だと思われるので少し詳しく吟味していく。終は大文典の伊曾保の出典例を口語 60 例余りの他に、文語例を 21 とする²⁶。この 21 例を四分類し、①を 6 例、②を 8 例とした後、「四例は天草本にある話の中の文でその口語文に近く、しかもそのうちの三例までが文語本にない」という。少しわかりにくいので言いかえてみれば、「残る 4 例のうち、3 例は天草版にのみあり、1 例は天草・国字両方にあるが天草版に近い」ということになるだろう。さっと数字だけ足してみると 21 になるが、よく考えれば天草本にしかない④にあたるのが 3 例で、天草・国字両方にある話のうち天草から引用した③にあたるのは 1 例のみということになり、総数は 21 ではなく 18 となって数が合わない。

土井はこの点を補おうとしているように見える。①を 7 例、②を 10 例とした後、③④にあたる「四例を次に示さう」と前置きして、③にあたる 1 例をやや詳しく取り上げ、④にあたる 3 例を挙げる。③にあたる 1 例について土井は次のように述べる。

先づ、日本大文典(102 丁表)に引用してある、「鳥は囀りを以て夏の暑さを慰む。」は伊曾保伝に属すべき文であるが、万治版本の文語文では、これに相当する部分が、「夏山の端がくれに我すさまじきくせをあらはしぬれば、あつき日かげも忘れ井の慰ぐさと成侍れ」となっている。²⁷

③にあたる 1 例をまず国字本の例文と比較するのであるが、ここでは先ず「鳥は囀りを以て夏の暑さを慰む」の出所・背景を知っておく必要がある。

16. 「イソップ伝」より ——天草版「囀りを以て夏の暑さを慰め」と国字本「暑き日影も忘れ井の慰め草」——

「イソップ伝」で、リュディアのクロイソス王に対して、イソップが寓話を作り、その中で自らを蟬に譬えて、咎もないのに殺さないでくれ、自分はむしろ人の役に立つのだということを訴える場面がある。話はこうである。ある男が穀物を荒らすイナゴを取りに、あるいは貧しいのでイナゴを取って食おうと出かけたが、途中で蟬を見つけて捕まえる。蟬は男に訴える。

天草版

ある貧者蝨を取らうずると行く路次において蟬を見付け、すなはちこれを取って殺さ

うとするところで、かの蟬の申す様は、「さりとは、我を殺させられうこと本意ない儀ぢや。それをなぜと申すに、五穀草木に障りとはならず、さしては人にも仇をなすことはござない。結句梢に上って囀りをもって夏の暑さを慰めまらするところに、理不尽に殺させらるることは何事ぞ」と、事をわけて申せば、その者道理にせめられて、たちまち赦免いたいた。

国字本

ある人イナゴを取りて殺さんとて行きける道にて、蟬を殺さんとす。蟬愁いて…人にさはりをすることなし。夏山の葉隠れには、わがすさまじき癖あらはしぬれば、暑き日影も忘れ井の慰草と成侍れ、かひなく命を…²⁸

蟬の鳴き声が暑さを忘れさせるかどうかはさておき——囀りというのも含めて蟬がユーモアを交えて言っているともとれるが——、ここで問題なのは天草版と国字本から引用される下線部である。大文典に引用されて前節の③に分類されるのは、天草版と国字本の両方にある話の中で天草版の文語に近い例であり、それは1例しかない。そのもとになっているのが天草版の下線部で、これが大文典では「鳥は囀りを以て夏の暑さを慰む」と引用されているのである。天草版の「囀りをもって夏の暑さを慰めまらす」という口語文が、大文典の「鳥は囀りを以て夏の暑さを慰む」という文語文に相当し、これが文語祖本の文になると土井は推測しているようだ。確かに厳密には「慰めまらす」が「慰む」に変わっている。ただしここでは蟬が「鳥」に変わってしまった。それでも土井は「ロドリゲスは所要の文例を引くのに、便宜上、その文の前後を取捨し改変する事は普通であるから、この場合にも、両文の首尾が相応していない点を深く問う必要はない」と述べる。蟬の囀りよりも、鳥の囀りが夏の暑さを慰めるとするほうが文典の例文としては適切であろうし、大文典の引用の仕方が今日的な意味で厳密でないのも事実ではあろう。

しかし問題なのはその先である。ここで土井は新村が挙げた例文を引き合いに出す。これは前節の4分類では④にあたる。天草版の「仰せは尤もなれども、我が身にとつては叶ひ難い」は、大文典で「尤も仰せは重けれども我が身にとつては叶ひ難し」となっており、同じく「医者は今まで出来るほどの病をば皆よいといはるれども、身は早や死ぬるに近いと」は「医者は今迄の患ひ出でくる程のことをば皆よきよきと申すさるれども、われは死するに遠からじと」となっていると述べた後にこう続ける。

「新村先生は…例を挙げ示して、『私の考では、文禄本[天草版]は、直接に拉丁[ラテン]の原本から口訳したのではなくて、その以前に或は既に存したかも知れぬ所の文語訳本の一異本に基いたのであるかも知れない』と推定せられた。誠にその通りであらう」²⁹

ここでしかし土井はダブルスタンダードに陥っている。天草版の「囀りをもって夏の暑さを慰めまらする」を、大文典が「鳥は囀りを以て夏の暑さを慰む」と引用して、蟬から鳥へ、口語から文語へ変えたのを、「両文の首尾が相応していない点を深く問う必要はない」と断言するのであれば、新村が引用する2例も同じ基準で判断し、両文の首尾が相応していない点を深く問う必要はないと断じるべきであった。土井には新村に対する遠慮があったのではないか。「誠にその通りであろう」と言ったあとに、「或いは、文語訳は口語訳の後に出了たのではないか、或いは又、文語訳と口語訳とが同時にあらわれたのではないか、とも考えられないでもないが」とも付け加えているのである³⁰。

ところで、囀りで夏の暑さを慰めるという箇所を大文典はなぜ国字本からではなく天草版から採ったのか。国字本からとってよかったはずだが、たまたま天草版から採っただけのことなのか。いまここで文語祖本説の問題とは直接関係はないかもしれないが、この場合国字本から例を取るのとは不可能だったのである。大文典が「夏の暑さを慰む」を引用しているのは「中性動詞」と呼ぶ文法事項を説明する箇所である。中性動詞は「～を」をとる動詞、現代風にいえば直接目的語をとる他動詞にあたる。「慰む」という動詞もその一つとして挙げられ、「夏の暑さを慰む」が例文として引用されているのである。一方国字本は「暑き日影も忘れ井の慰草と成侍れ」と和歌の一部かとも思われる七五調の和文脈に変えてしまい、「慰む」という動詞が「慰草」という名詞に変わった。これでは「慰む」という動詞が「～を」を取る動詞だとする文法項目の箇所に例文として取り入れることはできなかったはずである。

上の4分類の③にあたる例、すなわち天草・国字に共通する話のうち天草版から文語例として採られたとされる唯一の例がこれである。そもそも、文語体の国字本と総じて口語体の天草版に共通する話のなかから、まず口語例60程を別にして、残る文語例20余りを4分類することにどのような意味があったのか。分類するのであれば、むしろもっと単純に口語文語合わせて80例を1) 国字のみにある話、2) 国字天草両方にある話、3) 天草のみにある話とし、「鳥は囀りを以て暑さを慰む」の例は正確ではない引用として扱えばよかったのではないか。

さもないならばこの1例を根拠に、「ある人イナゴを取りて殺さんとて行きける道にて、鳥を殺さんとす。鳥愁いて…梢にとまりて鳥は囀りをもって夏の暑さを慰め…と申しければ」というような、蟬ではなく鳥に喋らせる文が文語祖本にあったのだと主張することになってしまう。ふと思い出したが、国字本でイソップの醜い容貌を描写するのに「眼の玉つばくみ出て」と突き出た目玉に言及する箇所がある。蟬の目玉も飛び出しているが、「つばくみ出て」というのはこのようなものかも知れない。リュディアのクロイソス王の怒りを解くのにこの蟬の寓話が功を奏し、こののちイソップは王に厚遇されることになる。もしこの時イソップが、自分を「見苦しい」蟬に譬えた寓話で、少し自虐的なユーモアを交えて

王の気持ちを引きつけなかったとしたら、王はイソップの才智を重用することにはならなかっただろう。イソップが自分を梢で囀る鳥に譬えたとしたら、王の失笑とさらなる怒りがあったかもしれないのである。この寓話のポイントは、蟬のように目の玉がつばくみ出したイソップの人々を楽しませる鳥の囀りのような弁舌の才であろうか。

話が少し脇道にそれた。大文典の伊曾保の文語例 20 数例の 4 分類法で、①と②は国字本から採られた例だということを示すに過ぎない。④は天草版にしかない話から採られた文語があった例ということになるが、これは大文典の引用の仕方が今日的な意味での厳密さを欠いているからだとしてよい。③は上で詳しく検証した通りである。純粋な文語である国字本と総じて口語体である天草版に共通する話の中から天草版に載る（または近似した）文語例というのが選択肢③なのであるが、この少し奇妙な選択肢の答として、囀りを以て夏の暑さを慰める蟬の例が選ばれたのである。③④に該当する四つの文例——「日本大文典に伝えられた四つの文例を以て、天草版本の底本となつたらしい文語本全体の文章を推察することは危険なようでもあるが」(p.64) という土井の言葉は、わずか 4 つの例文が伊曾保物語文語祖本説を形作ったこと示唆している。

17. 祖本説のその他の根拠

以下これ以外に祖本説の傍証のようなことについても検討をしておきたい。

1) 祖本の文章は国字本と天草版のどちらに近かったのかで説がわかる。この点では新村と土井で考えが異なる。新村は「現存の文語和字本はその原形の文語訳本と密接な関係があり且つ同じ文句の同じ説話が多々あるとした所が」(新村出全集第7巻 p.424) と祖本が国字本に近い可能性を述べるが、土井は「天草版本はその[祖本の]文章を甚だしく改変することなく口語訳したものであろう」(1963:64) と祖本は天草版に近いとする。

2) 大文典の引用の仕方が厳密でないこと。これは大文典の訳者である土井自身も述べように「ロドリゲスは所要の文例を引くのに、便宜上、その文の前後を取捨し改変する事は普通である」(p.63)。

3) 大文典には天草・国字以外からと思われるイソホと典拠が明示された例文はない。もし国字本にも天草版にも含まれない話が祖本にあったとするなら、大文典のなかに一つや二つ用例があってもよさそうなのに、80 余例のうちに全くないのである。このことは却って、天草・国字を合わせたよりもさらに多くの寓話を含むという意味での広本の存在を否定することになる。今に残る話がすべてであったと考えるほうが合理的である。

4) 抜書すなわち抜粹という言葉が問題とされることがあるが、文語祖本からの抜粹ではなく、シュタインヘーベル本 160 話、ドルプ本 300 余話からの抜粹と考えればよい。

5) 会話体の天草版平家抄訳よりも文語の『平家物語』が先だから、伊曾保もまた文語が

先にあつて口語が生じたとするのは無理な論法である。平家の場合はオリジナルが文語だから宣教師のためには分かりやすい口語抄訳が必要だったのであろう。逆にイソップ寓話はオリジナルがヨーロッパの言語だから、日本人が外国語を学ぶにも、また宣教師が日本語訳するにも、日常の会話に近い口語訳が先であつたらう。

6) 「イソップ伝」での最初のイソップの主人と（アテネの）商人の関係。

これは国字本の方が筋が通り、天草版は関係が不明瞭だということで祖本からの抜き書きの際の手落ちだとするのはあたらぬ。ラテン語底本に近いのは——訳のさいに少しの脱落があつたとしても——天草版であり、国字本はむしろこの部分を付け加えたスペイン語版に従つて話を整理した結果である。

終わりに

はじめ新村は『大文典』の文例に天草版からと思われる文例を見つけた。その後詳しく『大文典』の例文を検討するに及んで、その例が天草版と比べて「措辞もいささか違い、語尾も形が少し変わっている」ことを発見した。天草国字の話が相互に一致するものもあれば一致しないものもあり、まだ大文典の邦訳もない時代に、ここに天草版と酷似する文語例を見つけて、伊曾保の文語祖本説をかなり慎重な言い回しで提唱した。

大文典の邦訳が出た後、少し言葉は悪いが、終（1960 [1993:210]）がそこに載る伊曾保の例文のやや奇妙な4分類法を提出し、土井（1963:62）がこれを補正しようとしてダブルスタンダードに陥り、森田（1965:24）が先人の説に例文数を増やして古典文学大系に入れ、さらに大塚（1971:326）が便利で重宝する国字天草合冊の文庫本で4分類を箇条書きにする。新村が昭和の初めに提出した仮説が、大文典の引用の仕方もあるとはいえ、その後続く研究者たちの傍証のようなもので固められることになってしまった。1世紀近く想定されてきた祖本は存在しなかったとそろそろ断じてもいいと思う。明治の終わり、まだ壮年30代半ばの新村が、ポルトガル語の『日本大文典』の中にローマ字綴りの天草版の文語がかつた例文を発見して、「文禄本に由つたに違いない」と直感したほうが当たっていたというべきであらう。

邦文参考文献（出版年順）

- 1911 新村出「西洋文学翻訳の嚆矢」（明治44）（『新村出全集7巻1973, p.379-95】）
1928 新村出「伊曾保物語の旧代和本」（昭和3）（『新村出全集7巻1973, p.420-28】）
1955 土井忠生（訳）ロドリゲス『日本大文典』三省堂
1957-1960 新村出・終源一（校註）『吉利支丹文学集』（日本古典全書）
1963 土井忠生『吉利支丹文献考』三省堂

- 1965 森田武 『伊曾保物語』（日本古典文学大系『仮名草子集』）岩波書店
 1968 井上章 『天草版伊曾保物語の研究』風間書房
 1971 大塚光信（校注）『キリシタン版エソポ物語』（角川文庫）
 1973 『新村出全集』第7巻 筑摩書房
 1978 小堀桂一郎 『イソップ寓話 その伝承と変容』（中公新書）
 1982 渡辺和雄（訳） 『イソップ寓話集』 小学館
 1993 新村出・柗源一（校註） [『吉利支丹文学集』（東洋文庫）（日本古典全書の復刊）]
 1995 伊藤正義（訳）[訳注] 『イソップ寓話集』 岩波ブックサービスセンター
 1996 中務哲朗 『イソップ寓話の世界』（ちくま新書）
 1998 岩谷智・西村賀子（訳）『イソップ風寓話集』 国文社
 1999 中務哲朗（訳） 『イソップ寓話集』（岩波文庫）
 2000 武藤禎夫（校注）『万治絵入本伊曾保物語』（岩波文庫）
 2001 小堀桂一郎『イソップ寓話その伝承と変容（講談社学術文庫）[中公新書 1978 の復刊]
 2021 ローレンス・マルソー編・校注 『絵入卷子本伊曾保物語』 臨川書店

欧文参考文献（出版年順）

- ca.1476 Heinrich Steinhöwel: Aesopus. Fabulae Sammlung des Heinrich Steinhöwel.
 {シュタインヘーベル本羅独版}
 1521 Libro del sabio y clarissimo fabulador ysopo hystoriado y anotado.
 {シュタインヘーベル系スペイン語版 1521 セビリヤ刊}
 1536 Aesopi Phrygis et aliorum fabulae, Lugduni (Lyon) 1536. {ドルプ本 1536 リヨン刊}
 1546 Las fabulas del clarissimo y sabio fabulador Ysopo, nuevamente emendadas.
 {シュタインヘーベル系スペイン語版 1546 アントワープ刊 No.95 in: Iberian Books/ Libros Ibericos (2010)}
 1546 La vida y fabulas del clarissimo y sabio fabulador Ysopo, (… &) (Libro llamado) Exemplario.
 {シュタインヘーベル系スペイン語版と『カリーラとディムナ』の合本 1546 アントワープ刊 No.96 in: Iberian Books/ Libros Ibericos (2010)}
 1815 Aesopi Phrygis et aliorum fabulae, Matriti (Madrid) 1815. {ドルプ本 1815 マドリード刊}
 1873 Hermann Österley (ed.): Steinhöwels Äsop, Tübingen 1873.
 1970 Paul Thoen : Aesopus Dorpii, essai sur l'Ésope latin des temps modernes. *Humanistica Lovaniensia* 1970. p.241-316.
 1993 J.E.Keller & L.C.Keating (tr.): Aesop's Fables, with a life of Aesop, University Press of Kentucky.
 1999 Sebastian Brant: Fabeln. Carminum et fabularum additiones Sebastiani Brant - Sebastian Brants Ergänzungen zur Aesop-Ausgabe von 1501. Stuttgart, 1999.
 2002 Paola Cifarelli: Fables: Aesop and Babrius, *The classical heritage in France*, 2002, p.425-52.
 2003 Maria Pasqualina Pillolla: Laurentius Vallensis Fabulae Aesopicae, Genova 2003.

表

表1はシュタインヘーベル系と天草版上巻・国字本の対応を示す。天草版のイソップ伝では細かな章立てはないので、適宜話をくぎりその始めの文頭を示しが、便宜的なものである。特に話の順の移動が目立つものを線で結んだ。表2はドルプ系と天草版下巻の対応を示す。話の内容が関係するものを中心に線で結んだ。タイトルが同じでも、内容が全く違う話は除いた³¹。

表1. シュタインヘーベル系と天草版上巻・国字本の対応

国字本	タイトル	国字本	天草版 () は該当する国字本の段落の始め	Steinhöwel系
上	1 本国	上 1	イソップの生涯の事 (ヨーロッパの西リュキアといふ国の)	
上	2 荷物を持つ	上 2	✓ (証する時主人イソップが上を思はるゝやうは、「公衆の御ま	
上	3 樽を吐却する	上 3	✓ (さて食し終わつて後、互ひに目ぼまして)	
上	4 意人の不審	上 4	✓ (証する時イソップが主人様をせらるゝに及んで、下人どもに荷物 (国字本上2へ)	
上	5 熊の舌	上 5	✓ (それより後にかのイソップにいま二人を買ひ添へてサモスといふ所へ) (国字本上1へ)	
上	6 風呂	上 6	✓ (証する時サモス、百短一人サモスに不審を)	
上	7 サントス海道を敵さんと契約	上 7	✓ (証する時サモス、イソップに「わが第一と思はう荷物)	
上	8 標榜の文字	上 8	✓ (証する時サモス、イソップに「氣忌に行いて人の多少を)	
上	9 サモスの漁事	上 9	✓ (証する時サモス、イソップを連れて墓所へ)	
上	10 リュディアより船使	上 10	✓ (証する時サモスといふ所に大漁の量が有つて)	
上	11 イソップ、リュディアにゆく	上 11	✓ ((それより後リュディアの国のクロイソスと申す帝王より))	
上	12 イソップ、リュディアに居所をつくる	上 12	✓ ((イソップ程無うリュディアの國に降り着き	
上	13 商人かねを盗とす公事 (coll.14から)	上 13	✓ ((それから一番の書を作って帝へこれを奉つたれば))	
上	14 中問と信と節をあらそふ (出典不明)	上 14		
上	15 義者と他國の商人 (coll.2から)	上 15		
上	16 イソップと二人の持参物 (coll.5から)	上 16		
上	17 イソップ諸國をめぐる	上 17	✓ (その後イソップ諸國へ渡り、道を見せ教ゆれば、バビロニアといふ)	
上	18 イソップ皇子を定むる	上 18	✓ ((これもイソップはまだ子供を持たぬたによつて))	
上	19 ネクタネボス帝王不審	上 19	✓ ((エジプトの國のネクタネボス帝申す帝王イソップが逝去)	
上	20 ヘルミッポス、イソップがことを奏聞	上 20	✓ ((ヘルミッポスこの血を食ふ、いかに君、かのイソップを))	
中	1 イソップ皇子に皇孫の奏々	中 1	✓ エジプトよりの不審の奏々 (国字本中1へ)	
中	2 エジプトの帝王より不審返答	中 2	✓ イソップ皇子に教訓の奏々 (国字本中2へ)	
中	3 ネクタネボスに皇孫たもう不審	中 3	✓ ネクタネボス帝王イソップに御不審の奏々 (「ギリシアの國から)	
中	4 イソップ帝王に答る物 (coll.8から)	中 4		
中	5 学究不審	中 5	✓ (かくてエジプトの帝王、國家の学究を召して)	
中	6 作樂圖にすく (coll.19から)	中 6	✓ (また一列に各指くる不審には、「天地始まつてからこの方、まだ見聞かぬ)	
中	7 イソップ人に請げらる(Odo of Chertonから)	中 7		
中	8 イソップ夫婦の仲直し	中 8		
中	9 イソップ臨終において証言の書えを引いて終る事	中 9	✓ ((その時イソップ バビロニアの帝王に解を申し、諸國修行と志いて) (Rom.1.3から)	
中	10 イソップ物の賢えを引きける奏々	中 10		
中	11 狼と羊	中 11	✓ 上 1 狼と羊の賢へ	Rom. 1 1
中	12 犬と羊	中 12	✓ 上 2 犬と羊の事	Rom. 1 2
中	13 犬としらむ	中 13	✓ 上 3 犬が肉を食ふ事	Rom. 1 3
中	14 獅子王、羊・牛・野牛	中 14	✓ 上 4 獅子と犬と狼と豹	Rom. 1 4
中	15 日輪と盲人	中 15	✓ 上 5 獅子と	Rom. 1 5
中	16 狼と狼	中 16	✓ 上 6 狼と	Rom. 1 6
中	17 伊予王と驢馬	中 17	✓ 上 7 狼と	Rom. 1 7
中	18 赤田舎の鼠	中 18	✓ 上 8 鼠と	Rom. 1 8
中	19 狼と鼠	中 19	✓ 上 9 狼と	Rom. 1 9
中	20 鼠とたつぷり	中 20	✓ 上 10 狼と	Rom. 1 10
中	21 鼠と鼠	中 21	✓ 上 11 鼠と	Rom. 1 11
中	22 鼠と犬	中 22	✓ 上 12 鼠と	Rom. 1 12
中	23 伊予王と鼠	中 23	✓ 上 13 鼠と	Rom. 1 13
中	24 鼠と羊	中 24	✓ 上 14 鼠と	Rom. 1 14
中	25 羊が羊を望む事	中 25	✓ 上 15 羊と	Rom. 1 15
中	26 鼠と鳩	中 26	✓ 上 16 鼠と	Rom. 1 16
中	27 鼠と孔雀	中 27	✓ 上 17 孔雀と	Rom. 2 1
中	28 鳩と鳩	中 28	✓ 上 18 鳩と	Rom. 2 2
中	29 鳩	中 29	✓ 上 19 鳩と	Rom. 2 3
中	30 馬と獅子王	中 30	✓ 上 20 獅子と	Rom. 2 4
中	31 獅子王とバストル	中 31	✓ 上 21 獅子と	Rom. 2 5
中	32 馬と驢馬	中 32	✓ 上 22 馬と	Rom. 2 6
中	33 魚けだ物とたかひの事	中 33	✓ 上 23 馬と	Rom. 2 7
中	34 かのしし	中 34	✓ 上 24 馬と	Rom. 2 8
中	35 鹿馬と狐	中 35	✓ 上 25 鹿馬と	Rom. 2 9
中	36 鹿と五体	中 36	✓ 上 26 鹿馬と	Rom. 2 10
中	37 人と驢馬	中 37	✓ 上 27 鹿馬と	Rom. 2 11
中	38 狼とバストル	中 38	✓ 上 28 バストルと	Rom. 2 12
中	39 狼と人	中 39	✓ 上 29 バストルと	Rom. 2 13
中	40 獅子王と驢馬	中 40	✓ 上 30 獅子と	Rom. 2 14
下	1 鳩と鳩	下 1	✓ 上 31 獅子と	Rom. 2 15
下	2 鳩と鳩	下 2	✓ 上 32 獅子と	Rom. 2 16
下	3 鳩と鹿馬	下 3	✓ 上 33 獅子と	Rom. 2 17
下	4 鹿と人	下 4	✓ 上 34 獅子と	Rom. 2 18
下	5 鹿と狼	下 5	✓ 上 35 獅子と	Rom. 2 19
下	6 鹿と狐	下 6	✓ 上 36 獅子と	Rom. 2 20
下	7 狼と物話の事	下 7	✓ 上 37 獅子と	Rom. 2 21
下	8 鳩と鳩	下 8	✓ 上 38 獅子と	Rom. 2 22
下	9 鳩と犬	下 9	✓ 上 39 獅子と	Rom. 2 23
下	10 鳩と狼	下 10	✓ 上 40 獅子と	Rom. 2 24
下	11 野牛と狼	下 11	✓ 上 41 獅子と	Rom. 2 25
下	12 鹿と馬	下 12	✓ 上 42 獅子と	Rom. 2 26
下	13 獅子王と驢馬 (Rom.4.13から)	下 13	✓ 上 43 獅子と	Rom. 2 27
下	14 野牛 (山羊) と狐	下 14	✓ 上 44 獅子と	Rom. 2 28
下	15 ある人仏をいのる事	下 15	✓ 上 45 獅子と	Rom. 2 29
下	16 鼠と鳩	下 16	✓ 上 46 獅子と	Rom. 2 30
下	17 証言の事(Odo of Chertonから)	下 17	✓ 上 47 獅子と	Rom. 2 31
下	18 男二女をもつ事	下 18	✓ 上 48 獅子と	Rom. 2 32
下	19 がさみ	下 19	✓ 上 49 獅子と	Rom. 2 33
下	20 孔雀と鳩	下 20	✓ 上 50 獅子と	Rom. 2 34
下	21 人をねむは身をねむと云事	下 21	✓ 上 51 獅子と	Rom. 2 35
下	22 鳩と牛 (Rom.2.20から)	下 22	✓ 上 52 獅子と	Rom. 2 36
下	23 童子と盲人	下 23	✓ 上 53 獅子と	Rom. 2 37
下	24 修行者	下 24	✓ 上 54 獅子と	Rom. 2 38
下	25 鹿馬とがねの頭をうむ事	下 25	✓ 上 55 獅子と	Rom. 2 39
下	26 鳩と犬	下 26	✓ 上 56 獅子と	Rom. 2 40
下	27 土器屋をおこす事	下 27	✓ 上 57 獅子と	Rom. 2 41
下	28 鳩と狐 (coll.28から)	下 28	✓ 上 58 獅子と	Rom. 2 42
下	29 出家と泉のご (coll.20から)	下 29	✓ 上 59 獅子と	Rom. 2 43
下	30 人の心のさだまらぬ事 (col.22から)	下 30	✓ 上 60 獅子と	Rom. 2 44
下	31 真人に教化をなす(coll.6から)	下 31	✓ 上 61 獅子と	Rom. 2 45
下	32 鳩と狐 (Rom.2.13から)	下 32	✓ 上 62 獅子と	Rom. 2 46
下	33 三人き中の事 (coll.1から)	下 33	✓ 上 63 獅子と	Rom. 2 47
下	34 出家と盲人 (Odo of Chertonから)	下 34	✓ 上 64 獅子と	Rom. 2 48

表2. ドルプ系と天草版下巻の対応

天草版					Dorp内での訳者					天草版					Dorp (タイトルはIncert.は主格で、それ以外はde+専格)		
下	1	隣と下女			Incert.	29	Barl.	31	Valla	5	下	1	Valla	1	de vulpe et capro	狐と山羊	
下	2	二人の知書	Avi.8	Valla	7	Gouda.Avi.	9				下	2	Valla	4	de agricola et filiis ejus	百姓と息子たち	
下	3	檸檬と竹	Rom.4,20	Valla	8	Rim.	37				下	3	Valla	5	de muliere et gallina	女と鶏	
下	4	大海と野人		Valla	13						下	4	Valla	7	de duobus amicis et urso	二人の友だちと熊	
下	5	炭焼と洗濯人		Valla	17						下	5	Valla	8	de arundine et olea	藁とオリブの水	
下	6	病者と医師		Valla	11						下	6	Valla	9	de tubicine	フラッパ手	
下	7	降頭の貝吹き		Valla	9	Barl.	10	Rim.	46	下	7	Valla	11	de aegrotto et medico	病人と医者		
下	8	母と子	Rim.14	Valla	31	Rim.	90				下	8	Valla	13	de pastore et mari	羊飼いと海	
下	9	隣と犬		incert.	3						下	9	Valla	17	de carbonario et filione	炭焼き人と洗い盛り屋	
下	10	獅子王と熊		incert.	4						下	10	Valla	21	de asino et equo	騾馬と馬	
下	11	貪欲な者		incert.	10						下	11	Valla	23	de agricola et canibus	百姓と犬たち	
下	12	驢馬と狐	Avi.4	incert.	62	Gouda.Avi.	5				下	12	Valla	31	de filio et matre	息子と母	
下	13	馬と驢馬		Valla	21	Barl.	7				下	13	incert.	3	canis et gallus	犬と鶏	
下	14	二人同道して行く		incert.	32						下	14	incert.	4	leo et ursus	ライオンと熊	
下	15	野牛と狼		incert.	43						下	15	incert.	6	pavo et monedula	孔雀とコクマルガラス	
下	16	驢馬と獅子		incert.	16						下	16	incert.	9	hinulus	フラバの子	
下	17	蜜作り		incert.	34						下	17	incert.	10	avarus	欲張り	
下	18	鳥と鳩		incert.	50						下	18	incert.	12	testudo et aquila	亀と鷲	
下	19	隣と獅子王		incert.	78						下	19	incert.	13	cerva	鹿	
下	20	盗人と犬	Rom.2,3	Gouda.	19						下	20	incert.	15	cerva et vitis	鹿と葡萄の木	
下	21	赤いた犬	Rom.2,7	Gouda.	22						下	21	incert.	16	asinus et leo	騾馬とライオン	
下	22	鎌と小刀	Rom.3,12	Gouda.	37						下	22	incert.	20	serpens et cancer	蛇と蟹	
下	23	山と山人	Rom.3,14	Gouda.	39						下	23	incert.	23	mulier	妻	
下	24	狐と鳩		Gouda.	44						下	24	incert.	29	mulier et ancillae	女(妻)と女中たち	
下	25	亀と鷲	Avi.2	Gouda.Avi.	2	incert.	12				下	25	incert.	32	viatores	旅人たち	
下	26	漁人		Rim.	25						下	26	incert.	34	apiarius	養蜂家	
下	27	野牛の子と狼	Rom.2,9	Gouda.	24						下	27	incert.	43	hoedus et lupus	子ヤギと狼	
下	28	蜜の羊を飼うた事	Rim.10	Barl.	17	Rim.	53				下	28	incert.	50	monedula et columbae	コクマルガラスと鳩	
下	29	驢と鳥	Rim.1	Barl.	18	Rim.	2				下	29	incert.	62	asinus et vulpes [asinus ind.]	騾馬と狐	
下	30	狐と野牛	Rim.3	Valla	1	Rim.	5				下	30	incert.	65	asinus et vulpes [asinus et]	騾馬と狐	
下	31	百姓と子ども		Valla	4	Rim.	31				下	31	incert.	77	lupus et vetula	狼と年増	
下	32	尾張鳥と孔雀		incert.	6						下	32	incert.	78	de culice et leone	ブヨとライオン	
下	33	鹿と子		incert.	9	Rim.	69				下	33	Gouda.	3	de mure et rana	鼠と蛙	
下	34	片目な鹿		incert.	13						下	34	Gouda.	12	de leone senectute confecto	老衰したライオン	
下	35	鹿と葡萄		incert.	15						下	35	Gouda.	19	de fure et cane	盗人と犬	
下	36	鹿と蛇		incert.	20						下	36	Gouda.	22	de cane vetulo. qui ab hero	主人に罵倒にされる年とった犬	
下	37	女人と大道を敷む夫		incert.	23						下	37	Gouda.	24	de hoedo et lupo	子ヤギと狼	
下	38	バスター		Valla	23	Barl.	12	Rim.	30	下	38	Gouda.	35	de lupo et vulpe	狼と狐		
下	39	驢馬と狐		incert.	65						下	39	Gouda.	37	de vipera et lima	蛇とヤスリ	
下	40	娘と子を持った女	Avi.1	incert.	77	Gouda.Avi.	1				下	40	Gouda.	39	de sylva et rustico	森と田舎者	
下	41	雄と鼠		Gouda.	3						下	41	Gouda.	44	de vulpecula et mustela	子ギツネと獾	
下	42	ある年寄った獅子王	Rom.1,16	Gouda.	12						下	42	Barl.	7	de asino et equo	騾馬と馬	
下	43	狐と狼	Rom.3,6	Gouda.	35						下	43	Barl.	10	de buccinatore seu tubicine	フラッパ手	
下	44	老人		Rim.	28						下	44	Barl.	12	de agricola et canibus	百姓と犬(たち)	
下	45	獅子と狐	Rom.4,12	Rim.	59						下	45	Barl.	17	de oplione et agricolis	(羊・山羊の) 番人と百姓たち	
													Barl.	18	de aquila et corvo	鷲と烏	
													Barl.	31	de anu et ancillis	老女と女中	
													Gouda. (Avi.)	1	de nutrice et lupo	乳母と狼	
													Gouda. (Avi.)	2	de testudine et aquila	亀と鷲	
													Gouda. (Avi.)	5	de asino	騾馬	
													Gouda. (Avi.)	9	de duobus amicis et urso	二人の友だちと熊	
													Rim.	2	de aquila et corvo	鷲と烏	
													Rim.	5	de vulpe et trago	狐と山羊	
													Rim.	25	de piscatoribus quibusdam	漁師	
													Rim.	28	de sene mortem vocante	死神を呼ぶ老人	
													Rim.	30	de agricola et canibus	百姓と犬たち	
													Rim.	31	de agricola et filiis	百姓と息子たち	
													Rim.	37	de calamo et oliva	藁とオリブの水	
													Rim.	46	de tubicine quodam	フラッパ手	
													Rim.	53	de puero oves pascente	羊飼いの少年	
													Rim.	59	de leone sene	老いたライオン	
													Rim.	69	de vitulo et cerva	小牛(仔馬・小鹿?)と鹿	
													Rim.	90	de puero quodam fure	子どもの盗人	

注

¹ ローレンス・マルソー編・校注『絵入卷子本伊曾保物語』臨川書店 2021。

² 本稿で扱う各版の特徴と呼称は以下のとおり。

*天草版=天草本伊曾保 {日本国語大辞典の出典での名称} =イソポ (エソポ) のハブラス=キリシタン版 (エソポ物語) =文禄 (旧訳) 本。文禄2年 (1593) 天草で印刷されたポルトガル式ローマ字綴りのイソップ寓話とイソップ伝。新村出が漢字かなに翻字した後、校訂などが加えられる。室町・安土桃山時代の口語体であるといわれるが、部分的に少し文語脈も混じっているようにも感じられる。

*国字本=仮名草子・伊曾保物語 {日本国語大辞典の出典での名称} =古活字本+絵入整板本=慶元本+万治本。天草版との関係をもちつつ、慶長・元和 (1596-1624) 頃に第1種古活字本が出たとされるが、寛永極初期 (1624-25) とする説 (李澤珍「古活字版『伊曾保物語』の出版年代再考」(『国語国文』第87巻第7号 2018 p.28)) もある。ロドリゲス『日本大文典』(1604-1608) に国字本からも例文が引かれているので、少なくとも手書きの写本か巻物のようなものがこれ以前に存在していたと考えられる。万治2年 (1659) 版は板に彫った整板本。

*シュタインヘーベル Steinhöwel 本。1476年頃ドイツのウルムで人文主義者シュタインヘーベルが印刷出版した羅独イソップ寓話。本文そのものは中世のラテン語イソップを主体とするがそうでないものも混じる。出版後しばらくしてヨーロッパの各国語に翻訳されることになる。1476年頃に出た羅独初版本と基本的に同じ構成を保っているこれらの訳も含めて、ここではシュタインヘーベル系と呼ぶことにする。

*シュタインヘーベル系スペイン語版。1489年サラゴサ刊はその影響と重要性もあって英訳がされているが、英訳版はシュタインヘーベル本から採った挿画つきで参照しやすい。1521年セビリヤ刊はシュタインヘーベル本のを参考にしたとみられる挿画が各話ごとに挿入されている。活字はゴシックで豪華本らしく見える。1546年アントワープ刊は、今日の活字に近く廉価版ふう。この版は巻末に「鳩と狐」の話が加わっており、国字本との関係が窺われる。

*ドルプ Dorp 本。本稿では特に断らない限り 1536年リヨンで出版されたものをこう呼ぶ。ルネサンス期にもたらされたギリシア語写本からラテン語に翻訳された数種類の訳を主体にする。所収寓話の増減はあるが、版を重ねながら17世紀あるいはそれ以後にも影響は及ぶ。数種類の訳でも話の重複をいとわない構成となっている。1536年版はイタリック体活字。このドルプ系の1815年版は A. Gibbs がマドリッド版と呼んでいるもので活字はローマン体で、挿絵版画もある程度入っているのを参照に便利。

³ 天草版は新村・柊 (1993)、大塚 (1971) を参照。国字本は森田 (1965) と大塚を用いた。

⁴ 新村出「伊曾保物語の旧代和本」(昭和3) (『新村出全集』7巻 1973, p.420-28) あたりが初めか。「西洋文学翻訳の嚆矢」(明治44) (同 p.379-95) では「ロドリゲズの『日本大文典』には『エソポ』の和訳文が実例に引用されてある。文禄本に由つたに違いない」(p.392) となっているので、明治末年にはまだ文語祖本説には至っていない。

⁵ 小堀桂一郎『イソップ寓話』1978 (中公新書) (講談社学術文庫 2001, 特に p.177-83)。シュタインヘーベルの名は、先行する上田敏、新村出の研究で挙がっているが、Österley による復刻本をもとに伊曾保の底本として論じたのは小堀である。なお天草版については「エソポが作り物語の抜き書き」として「狼と羊の譬への事」から始まる25話を上(巻)とし、「エソポが作り物語の下巻」として「鶏と下女の事」から始まる45話を下(巻)とする。

⁶ 小堀 2001: 182。

⁷ 柊、土井、森、小堀、遠藤、武藤など。

⁸ 第6集はシュタインヘーベル本での名称にそってリミキウスとした。イタリア語名 Rinuccio の綴りがラテン名となる際に紛れたものである。本稿では人名としてはリヌッチョを用いることとし、シュタインヘーベル本所収のものは Rim. [St.] と、ドルプ本のは Rim. [Dorp] と区別する。その後の数字はシュタインヘーベル本ではここに収められた17話の順とし、ドルプ本ではリヌッチョが訳した全100話の順とする。第5集「選外寓話集」は小堀に見られる呼称。紛れないように、シュタインヘーベルの表記にそって本稿では第5集を extra.、第8集を coll. と略す。extravagans (pl. -gantes) は中世ラテン語で「さまよい出る」の現在分詞。英語の extravagant に照らせば、ここでは突飛な話くらいの意味であろう。英訳は第5集を the fanciful fables of Aesop としている。初刊のシュタインヘーベル本は羅独版だが、ドイツ語は今日の綴りとはだいぶ異なる。参考にしやすいものとして、シュタインヘーベル本の仏訳をさらにキャクストンが英訳したものを邦訳した

伊藤正義「イソップ寓話集」がある。これは各国語訳諸版の字句の違いも比較している。また1489年に出たスペイン語版の英訳が Keller&Keating 1993 である。シュタインヘーベルおよび天草国字本との関係については特に小堀 (2001:145-59; 177-83) が詳しい。

⁹ 内容が金に貪欲な司教を揶揄しているのが、当時の宗教改革を背景とするなにか理由があったのかもしれないが、同じ年で同じ発行元である。No.95の表紙の下には「ブルゴーニュ(家?)の庇護(楯)のもとに en el escudo de Borgoña」とある。

No.95はシュタインヘーベル系『イソップ寓話』(1行平均約7語×30行×約210葉)で、内容の点に関しては、豪華本の体裁の1521セビリア版に「ライオンと狐」「狐と鳩」が付け加えられたものである。この2話は次のNo.96の『カリーラとディムナ』の13・17章と同じ。No.96はシュタインヘーベル系『イソップ寓話』(1行平均約10語×33行×約140葉)と『カリーラとディムナ』(同、約130葉)であるが、『カリーラとディムナ』は Exemplario として挙がっている。「用例集」「戒めの話」「寓話」と言ったところか。邦訳で東洋文庫に入る菊池淑子訳『カリーラとディムナ』とだいたい同じ構成であるが、底本が違うのである程度話の出入りがある。邦訳は20世紀のアザーム校訂版に基づくが、16世紀スペインの『カリーラとディムナ Exemplario』は写本に基づくものであろう。以前に国字下28「鳩と狐」について論じたときはNo.96を用いた。マルソー『絵入巻子本』というスペイン語版はNo.95である。「ライオンと狐 del leon y del raposo」は東洋文庫に入る邦訳の第10章「ライオンと山犬」にあたる。また「鳩と狐」は同書(p.336)では「鳩と狐とあおさぎ」として言及される。

¹⁰ イソップの主人と商人の関係に関連して国字本のほうが破綻がないとする指摘があるが、これは国字本がやや錯綜した展開を整理した結果であり、話の順は天草版が正統である。

¹¹ Aesopica: Aesop's Fables in English, Latin and Greek. <http://www.mythfolklore.net/aesopica/index.htm>

¹² Paul Thoen: Aesopus Dorpii, Essai sur l'Esope latin des temps modernes, *HUMANISTICA LOVANIENSIS*, Vol. XIX, 1970, p.241-316.が詳細を極める。ドルプ本の訳者・翻案者とその収録話についてはp.290-91, 295-96. 以下の解説はより簡便な Paola Cifarelli: *Fables: Aesop and Babrius, The classical heritage in France*, 2002, p.425-52.に多く拠った。

¹³ Cifarelli p.445に拠った。Thoenの記述と異なるようだが、それ以降の研究が反映されているのかもしれない。

¹⁴ Thoenが挙げている16世紀初頭から19世紀半ばに亘るドルプ本200版(刷)近くのうち、Gibbsの1815年版はNo.194、遠藤潤一「いそぼ物語の原典の系統について(そのⅢ)」(奈良大学紀要13号1984.p.175-190)で1942年版(天理図書館蔵)と述べられるのはNo.92にあたるであろう。氏には原典的研究とする大著があるが、文語祖本説にたち一種独特な文体もあって通読できていない。ただドルプ本と天草下巻に関して上記論文で目にした2度の採話過程というのはそのとおりだと思う。

¹⁵ Cifarelli p.445.

¹⁶ 大塚 p.322は1話とする。

¹⁷ 訳文の右肩の数字は、スペースで区切ったものを単位として、漢文の返り点のように用いる。日本語もラテン語もある程度語順の自由がきくので、この方法もある程度有効ではないかと感じられる。ただし、前置詞は名詞・代名詞の前に、従属接続詞・関係詞は多く節のはじめに置かれるが、これは日本語の語順に合わせるのとは不可能である。返り点方式を使えなくもないであろうが、煩わしくなると思われるので、このあたりは無視した。厳密ではなく便宜的なものである。

¹⁸ さらに言えばVallaはこの話をギリシア語底本にこれもまたかなり忠実に訳している。cf. M. P. Pillolla, p.51-52. したがって天草版はギリシア語原文にも近いといえる。ただしVallaが基いた写本の系統(Ⅲ, Perry)が邦訳のそれとは少し違うため、話の冒頭部の違いが目立つ。中務訳では、井戸に入った狐が出られなくなり、喉が渇いて水を飲みに行って来た山羊を騙して井戸の中へおびき寄せ、その後山羊の背に乗ってという展開で、狐の騙し方が二段構えである。

¹⁹ M. P. Pillolla, *Laurentius Vallensis Fabulae Aesopicae*, Genova 2003, p.51: per esempio è amplificata la descrizione della goia della volpe (*pre gaudio ... gestiebat et exultabat* = ἐσκίρτα ἠδομένη), e soprattutto con la precisazione *nihil de hirco cure habens*.

²⁰ 「はねびちたく」については新村・終 p.322、大塚 p.175、を参照。

²¹ 注20参照。

²² Thoen p.290: Braune donne la réponse suivante: Barlandus imite quelques fables de Romulus. La plupart remontent aux traductions Rimicius et de Valla.

²³ Goudaはアウィアーヌスに拠っているが、天草版はおそらくそこまでは遡らない。さらに遡るバブリオスやパエドルスにも驚と亀との会話がある。ただしテキスト伝承の関係で天草版はこれ

らにも直接関係はしないと思われる。

²⁴ 国字本はこのようにして筋が通ったように見える。このことが逆に祖本説からすると、特にアテネの商人に関して、天草版は祖本から口語訳される際に手落ちがあったのだということになる（終 p.211f.）。国字本の改変で整理されてスッキリしたという面は確かにあるが、全体を見渡した時に損なわれてしまったことも一つあると思う。国字本ではイソップ伝冒頭の柿の吐却の話が荷物運びの話の後に移された。もとにあった伝冒頭の柿の吐却と、伝半ばの養子の裏切りと、伝の終わり宝物盗みの話は、いずれも讒言・濡れ衣ということをテーマにしている、イソップ伝の重要な枠をいわば形作っているのではないかと考えるのだが、この構造が改変で崩れてしまう気がする。アテネについて、国字本アテナスで引用した。実際にはアテルスとなっているが、アテナスの誤りだと指摘されている。「る」「な」の字形相似によるという（森田 p.361）。変体仮名か。ギリシアのアテネは、古典期の語尾-ai が、ラテン語で-ae、スペイン・ポルトガル語で-as となる。

²⁵ 『日本大文典』（土井訳）に伊曾保からの出典と記してあるもののうち文語と思われる文例をだいたい拾い出してみる。30例ほどになるが、重複して出てくるものや異文のようなものも含めた。多少口語のようなものも混じったかも知れない。これらを除けば20数例としてよいだろう。森田が考えるもう1例もこのなかに含まれているであろう。左の数字は邦訳の頁数。

- 65 仰ぎ願はくは三分一を彼に与へ、残りを我に賜べかしと言ふ
 166 詮ずる所猫の首に鈴をつけて置き侍らば、やすくしなんといふ
 167 その魚を少し与へよ餌食になしてんと言ひければ
 172 獣をやとひてこそ参らめとて、陸に上りぬ
 183 かの者憂ひて曰く、われ正直をあらはすと雖も、御辺は無理を宣ふなり
 184 有らう程の事をば型の如く知り侍ると申す
 188 君子たらん者故なきゆうらんにつれなば、忽ちかかる恥をうくべし
 193 悪道には入り易く、善には入り難し
 198 尤も仰せは重けれども、わが身にとっては叶ひ難し
 200 医者の方迄の患ひの出でくる程の事をば皆よきよきと申さるれども、われは死するに遠からじと
 201 ある帝二人の人を召出し給ふ事ありけり、一人は欲心深きものなり、今一人は人をねたむ心深きものなり
 246 洗濯人の許に行て見れば、家も広く、間も多きを見て
 322 悪道に入り易く、善に入り難し
 359 我より下の者に崇敬せられうよりも上たる人に諫めらるる事を喜んで交わりをなす
 383 鳥は轉りを以て夏の暑さを慰む
 384 上たる人に諫めらるる事を喜ぶ
 429 そなたと我等縁こそ尽きつらう
 429 われこそ水屑となり果つるとも
 429 われこそ空しう果つるとも
 432 この鶏さへないならば、かほど払暁には起されまじいものと言うて
 433 命をつがるる牛をさへ食せらるる上は、況していはん
 440 仰せは尤もなれども、わが身にとっては叶ひがたい
 484 下輩の身として権門高家の人と争ふ事なかれ
 484 首ゆがみ、丈低く、足長くして、また太し
 484 その時代この伊曾保程人にすぐれて醜き者なきが如く、その知恵才覚、また並ぶ人なし。その後またかの伊曾保に、汝は如何なる者ぞと問ひ給へば
 486 夢とも、現とも、覚えぬものかな
 486 破れた衣装を着る君子もあり、藁屋の中に貴人の座せらるる事もあり
 550 如何にすぐれて気高きいつくしなる御方へ申すべきことあり
 551 別には誰にもやらぬものと言はるれども
 560 わがまだ生きてあるうちに、別の妻をば何としてお持ちあらうぞ
 560 まだ存命仕る事もあらうずると奏すれば
 606 悪道に入り易く、善に入り難し

²⁶ 以下、新村・柗ではなく柗とする。4分類の解説に新村は直接関わっていないようである。

²⁷ 土井忠生『吉利支丹文献考』三省堂 1963, p.62.

²⁸ ここでは漢字の当て方を大系本ではなく大塚 p.205 によった。

²⁹ 土井忠生 p.63-64.

³⁰ このあと天草版平家と金句集に言及があるが、伊曾保は原典が西欧語であるから文語訳と口語訳の成立順に関して同列に論じることはできない。日本語を学ぼうとする宣教師にとっては、文語原典の平家と金句集への入門書としてこれらの口語抄訳が必要とされたのであろう。これに対し欧語原典のイソップ寓話は、日本人にはまず口語で訳されて文語に磨き上げられるほうがほうが普通であろうし、宣教師にとっても会話の日本語からはじめて文語へと移っていく流れが考えやすい。

³¹ 天草下1「鶏と下女の事」は話の順序とタイトルからすると、は Valla 5 の「女とめんどりのこと *de muliere et gallina*」に対応するように見えるが、実際には *incert. 29* 「女と下女たち *mulier et ancillae*」と *Barl. 31* 「老女と下女たちのこと *de anu et ancillis*」と同じである。ただしこの場合はタイトルそのものに関連する点があるので線で結んだ。話の関連の度合いは場合により異なるが、できるだけ広い範囲をカバーした。(注の一部に本文と重複する部分が残ったかも知れない。aeなどが中世の綴りのeと多少紛れている可能性が残る。本稿の訳は辞書と首っ引きのものである。誤訳の不安も大きいのでできるだけ原文を付した。識者の指摘を乞いたい。)